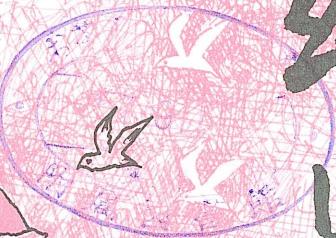


家庭
保育所
幼稚園

幼児の教育



10

第八十一卷第十号
日本幼稚園協会

好評発売中!!

みんなで たのしむ

折り紙あそび

荒川智子 著

どのページも美しい写真と、保育に生かすアイデアがいっぱい。

昔から伝わった作品と、著者オリジナルの創作作品の中から子どもたちが大好きな折り紙100種余りを紹介。わかりやすい図解付。誕生日カードやプレゼント、室内の環境構成に生かすアイデア、保育に生かすヒントも掲載。保育に折り紙を使うことによって子どもと心のふれあうなど、いろいろ遊びが展開されます。

B5判・64頁・1,200円・平成15年8月

幼児の造形百科

桜井俊夫 著

幼児の造形活動に関する幅広い知識と技術を身につけよう。

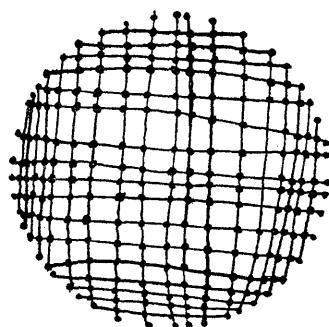
本書は幼児に必要な造形活動の基本的な考え方をはじめ、子どもの発達に応じた指導計画のたて方、さらに具体的な素材別指導方法などをとりあげた総合的な造形指導百科です。「描く」「写す」「映す」「作る」「壁面構成」の五つの柱からなっていて、身近な紙、粘土、木、発泡スチロール、段ボール箱などの特色を使った造形遊びの指導書です。

B5判・224頁・定価1,000円・平成15年8月

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十一卷 第十号

幼児の教育 目次

—第八十一卷 十月号—

男性保育者に望むもの……………黒田実郎：(4)

★座談会

お茶の水女子大学の植物をめぐって

——身近な樹木の話——
(6)

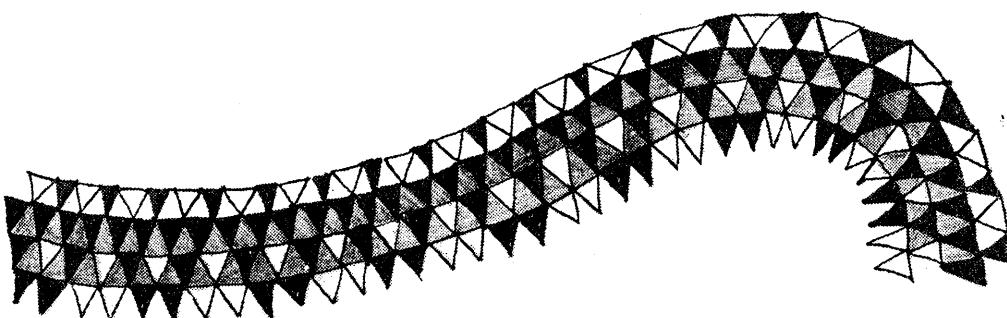
《出席者》 大槻虎男・津山 尚・柳田為正・今井百里江子

母の故郷 ⑥

——福永津義・人間とその仕事——
高橋さやか：(20)

近代短歌に現われた子ども (五) ……大塚雅彦：(28)

© 1982
日本幼稚園協会



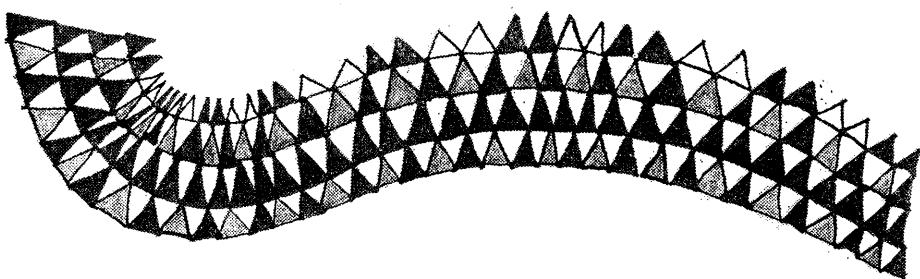
ブリューゲルの「子供の遊戯」 8

——竹馬(ぼくば)から独楽回しまで—— 森 洋子 (36)

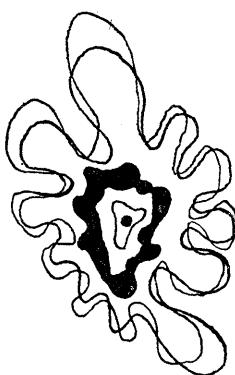
☆幼児の教育復刻記念懸賞論文 優秀賞論文

生活主義保育の源流 (下) 金子真知子 (51)

表 紙・うすい・しゅん
表紙題字・比田井和子
カット・福田理恵



男性保育者に望むもの



黒田実郎

(聖和大学)

百年の歴史を誇る聖和女子大学が、一昨年創立二世紀を迎えるにあたって男女共学に踏み切った。昨年度はまず皮切りとして大学院修士課程幼児教育学専攻コースのみを男性に開放したが、三六歳の会社員を含めて五名の男子受験生があり、そのうちの二名が合格した。今年度からは、学部の幼児教育学科にも男子を受け入れることになったが、男子受験生の数は、われわれの予想を上まわり五五名もあった。結局、

に男子学生を受け入れるとあっては、多少のとまどいがあったというのがいつわらざる告白である。

大学院での共学はすでに一年が経過し、男子学生もいよいよ修士論文作成の段階になっている。過去における私の経験からいうと、女子学生は一般的に大変な勉強家で、綿密にデータを収集して、よくまとまった論文を書く。ところが独創性や創造性という点になるとやや物足りなさを感じさせられるのである。これは何も大学生にかぎったことではない。子どもの自由遊びや造形活動においても、女児は一般的に型破りの行動が少なく常識的であるが、そのため個性的でないともいえる。ところが、男児はかなり粗野であり、標準からの逸脱もいちじるしいが、反面において個性的で興味深い面

ではない。しかし、聖和のように百年の伝統のある「女の園」ではあるが、その間、関西学院大学、神戸大学、大阪大学など男子学生の多い大学で長らく非常勤講師をしてきたので、共学といつても別段初めての経験ではない。しかし、聖和のように百年の伝統のある「女の園」

も認められる。

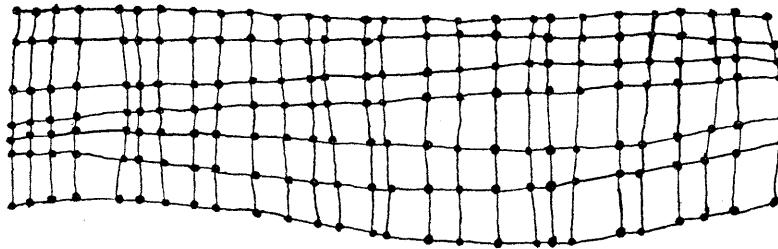
私は聖和に勤めて約三〇年になるが、その間、関西学院大学、神戸大学、大阪大学など男子学生の多い大学で長らく非常勤講師をしてきたので、共学といつても別段初めての経験ではない。しかし、聖和のように百年の伝統のある「女の園」

私がかつて師事した米国ブラウン大学のショロスバーグ教授は、男女に見られるこのような差異のおもな原因として、子どもに対する親の養育態度を重視し、それを“lesson and problem”という術語で説明した。つまり、親が女児に対する場合は手本を示して懇切に伝授（lesson）する傾向があるのに対し、男児に対する場合は手本を示さず單にヒント（problem）を与えるに過ぎないので独創性を育てやすい、という説明である。

一九六〇年代頃までのアメリカ心理学界では学習理論が支配的であったので、ショロスバーグ教授の「レッスン・アンド・プロブレム」仮説は當時非常に注目された。ところが最近になって、男女における行動特性の差異は、生後の学習よりも生得的要因によつて左右される面が大きい、という説が台頭した。たとえば、ガレイとシャインフュルドは、活動性における男女の性差は生後二三時間では明らかでないが、七時間までの間に顕著になるといい、またモスは、女児に比べて男児は生後間もなくから睡眠時間が少なく、泣き叫びや体の動きが激しい、という事実を指摘し、男児は動的で女児は静的という一般的特性が親の養育態度よりも、むしろ生來的要

因によるところが大きいのではないかとのべた。このほか、多くの研究者によって、触覚、聴覚、視覚における敏感度や、知能の諸因子における性差は、学習的要因よりも生物的要因によって影響される割合が大きい、という説が提唱されている。これらの生来的傾向に加えて、親たちが男女児のそれぞれに対して異なる態度で接するということが、おそらく性差をさらに助長するのであろう。

ところで男子学生の研究活動に戻るが、私が彼らに期待するのは、従来の女子学生とは異なる観点から子どもたちの行動を観察し、それを分析して、新しい幼児教育觀を生み出してほしいという点にある。彼らのある者は男性保育者として、将来、現場で活躍する者もあるが、もしも彼らが女性保育者と同様な態度で子どもに接するのでは、女性の職場にあって男性が進出するということの意味がない。女性では得られない何のものが付加されることによってこそ男性進出の意義が認められるのである。ピアジーの発達理論が、女性心理学者インヘルダーの実証的裏づけによって大きく発展したように、男女の幼児教育研究者がそれぞれの特色を生かして協力し、幼児教育がさらに発展することを望んでいる。



《出席者》

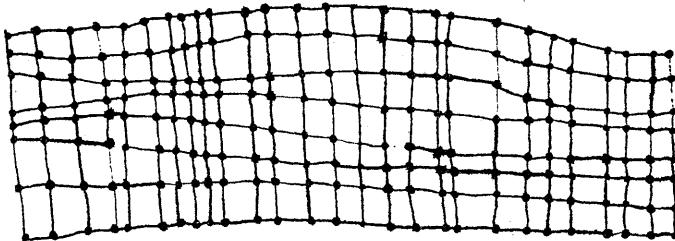
男 虎 槐 大 尚 津 山 柳 田 為 正
江 子 百 合 今 井

眞 守 津 司 会

津守 関東大震災で校舎が焼失し、ここ大塚に移転してまいりましたが、その時、お茶の水時代の樹木も向うから幾らか持つてきたらいいんです。ところが、近年、学内ではあいついで改築・新築があり、木が移されたり、また切られたりもしているのですから、今のうちに、皆さんから、いろいろ伺つておくことは、意義のあることではなかろうかと思いました。学内の植物をめぐつて、どうか御気軽にいろいろお話をいただければと思います。

それからさきほど津山先生から御提案がありました、話しているだけでなく、実際に学内を歩いてみると、いろいろ思い出すんじやないかと言われるものですから、この座談会の後、ちょっと歩いていただいた方がいいかと思つております。

では、昭和八年にここ(たまち)の建物ができるまで、まず正門(今・東門)と言つていますけれど)を入つて、ずっと並木があつて……そのあたりからお話を伺えたらと思います。



《座 談 会》

お茶の水女子大学の植物を

めぐって

— 身近な樹木の話 —

〔昭和57年4月16日に、家政学部小会議室
で行なわれた座談会より〕

イチヨウ・キンモクセイ・お茶

大槻 正門から入ったところに、イチヨウの並木がありますが、どういういきついで植えたのか、私はその時、就任して間がないのでよくは知らないんですけどね……まあ、東大正門のイチヨウ並木あたりからの着想かも知れませんね。

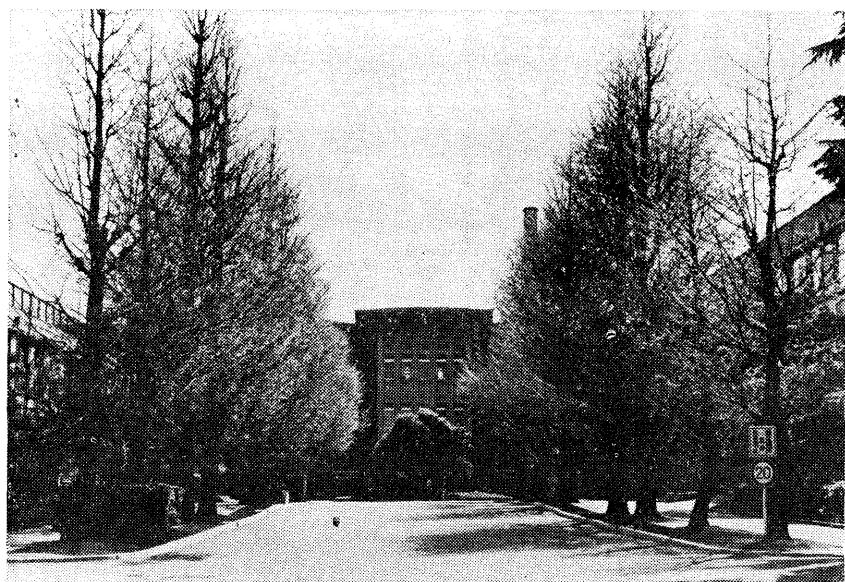
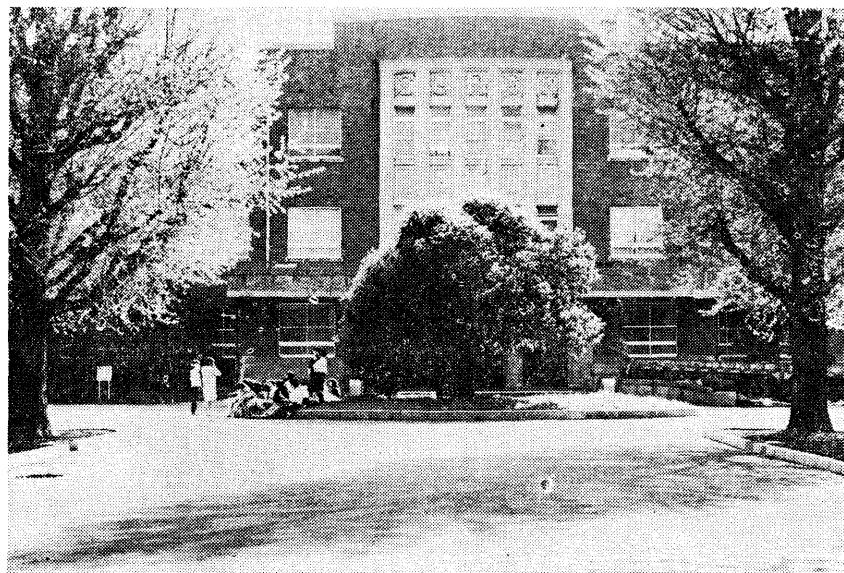
それと、玄関前のキンモクセイも最初からあった。この木を植えるということは保井先生が提案して、尾上柴舟先生が口をきかれて厚木の農家から移植されたということです。

今井 それは保井先生がお話しになつたんですか？

大槻 ええそうです。モクセイは、東京都内ではあまり大きく育たないんですが、神奈川県には、見事な大木が沢山あって、そしてよい香りがするということで……。

津山 キンモクセイっていうのは園芸的に中国で出現したもので、実はなりません。親は、ウスギモクセイというので九州の南部や中国の東南部に野生があります。

東京は寒すぎるんです。なかなか、この大学の樹のよう



東門のイチョウ並木とキンモクセイ

には大きくなれません。中国名は「丹桂」です。

大槻 イチヨウは丈夫ですがキンモクセイは、適地でないところに移植されたきらいがあるんですね。また戦時中、手入れが行きとどかなかつたので、キノコが発生してしまいました。キノコがはびこると木がいたむ。それで幹の上方半分は枯れてしまつた。

津山 その後ひじょうに弱りがひどくなりましてね。どうしよう、どうしようって、結局、評議会の問題にまでなりました。大

槻先生の今の、その悪くなつたというのは、戦後ぐらいでしょ？

大槻ええ、そうです。補植をするもつ

と前です。適しない土地ということに加え

て、公害がひどくなつたんですね。困いを設けたりしました。結局、二本の小さなキンモクセイを補植することになりました。

これは実は私が提案したんです。藤田健治学長の時に、それを教授会にかけたわけで

すが、例によつてなかなか通らなかつた。けれども、藤田学長の決断で、私の家庭にあつた二本を移したわけです。

津山 ああ、そうだつたのですか。

茶毒蛾って、椿にもつくんですか？

津山 はい。そうです。

大槻ええ。これはね、ヤミ取り引きをやつたんですよ。（笑）教授会の正式の決定ではなかつた、しかし別に苦情の申し出はなかつたわけですよね。（笑）

それから昭和四十年頃旧図書館の脇にお茶の木と、クロマツを私の家庭から移植したこともあります。どちらも図書館の新築移転に際してなくなつてしましました。

今井 桜の花にしようかつて……？

お茶の木の件は今日の話題になるんじやないかと思いますが……。

大槻 それまでの校章は桜の花の中央に

お茶の水女子大学なみにお茶の木がなかつたわけです。これには理由がある。それはお茶の木には、茶毒蛾チャドウガという害虫がつく

んです。この幼虫は毛虫です。これに刺さるとひじょうに痒いし、不快です。幼稚園のある学校では特別に気をつける必要があ

ります。

です。お茶の水女子大学になった時に、先生達も学生も旧態を脱却しようつていう空氣があつたんでしょうね。そのひとつの中でも、校章も新しいものにしようつていしたことになつたんですね。そこで、お茶の花が候補に上つた。それで、津山先生がそれを描かされたんですね。

津山 でも、採用されなかつたですよ。

(笑)

今井 では、現在の校章は、先生がお描きになつたものではないわけですか？

津山 描いたには描いたんだけど、やつぱり素人じやね。デザインの専門の人には直してもらつて、ただ実物と矛盾しないかっていう相談があつたけどね。

津守 それでは、お茶の木はこの学内には一本もなかつたわけですか？

大槻 そうです。石神井の家に一反歩の庭があつたので、家政学部の山西（貞）さんには頼んで、狹山から苗木をもらつて、植

生たんです。一時、手製のお茶を作つたこともあります。それで、私が図書館長になつた時、自分で掘つてきて移植しました。前、大きなヒマラヤ杉がありました。それはその後あんまりいい扱いを受けなかつた。

津山 結局、絶えましたね。

今井 私はお茶の花が好きなので、大事にしていました。種子が落ちると、よ

く下に埋めておいてやつたんですよ。旧食

化研の玄関脇にかすかながら残つていてゐるんですけど。ついにあの辺りの木造が取り払

われて、今の理学部二号館ができ、それで殆んど整理されてしまつて……。

大槻 井上前学長は、植物が好きで、努力して自分で植物を選定したりしたようです。

オリーブ・ダイチヨウ・クヌギ

大槻 これは、それに関係あるわけでもないけど、オリーブの木ね。これ最初に植えたのは、蠟山学長。学生運動がまだ盛んだった頃、学長に就任した。それでね、学生運動への対応として、構内の緑化計画を考えた。芝生を整備したり、食堂の前の高台を芝生にしたりね。その時、小豆島のオリーブの苗を学内寮の前に植えたんです。

津山 井上さんの名が出たのぢやつと申しあげますがね、今、東門から入つて左の、附属小学校新校舎、あそこの角には前、大きなヒマラヤ杉がありました。それでは、やつぱり公害のせいか、あの実がならないんですね。ところがある年にね、一つだけなつた。きれいな浅緑のね。それを発見したのが、井上さんなんですね。それで、なかなか御自慢だつたんですね。

津山 実がなつてますね。

か？

今井 学生会館への坂道をこちらから上つて行くと奥の方で、実がたくさんなるんですね。特に食物科の福島先生はあれを塩づけにして、瓶詰にしてましたよ。今年もいただきました。

大槻 二年前の夏に、井上前学長の部屋で、オリーブのピクルスを戸棚から出して試食させてくれました。こんな寒い所でよく育ったものです。

津山 わりあいにね。お茶大は場所が高い所でしょ。だから、他の場所より寒いんですよ。

大槻 オリーブは、高いところ、乾いたところがいいんですよ。

柳田 本家本元の小豆島でも、最近あまりうまくいかないという話ですね。

津守 それからずっと幼稚園の方へまいりまして、幼稚園の中、あるいは周囲の植物について少しお話を進めていただけます

津山 そうですね、幼稚園の門の前に、

おりましたが、最近は全く取り扱われてし
まいました。

モチの木が数本ござりますね。あれは、雄

津守 それは向うのお茶の水の校舎からと雌がうまく植わっていて、実がちゃんと

なっていますね。わかつて植えてありますね。

今井 幼稚園のフジはお茶の水から移植

してきたといいますけど……。

津守 そういう話を聞いているんですけど

ど。事務棟に近い側にね、大きな棚がござりますね。

今井 あの幼稚園の藤とは別ですが、これはどこから移植したのかわかりません

が、ここの中館の屋上に木造の、白いフジ

棚があり、その下にベンチがありまして

ね、そうちょうどう外から見ますと、建物の中央のところに国旗のポールが立つております。

柳田 幼稚園といえば例の大イチヨウの一件、これだけはぜひとも津守先生のお口からあらためて直々お話しitただきたい。

ますね、あの辺りの屋上にちょっと籠んだところがありました。そこにペーパーラ風にたつてました。戦後かなり後まで残つて

津山 あれは、昔、大イチヨウが二本あつたんでしょ。一本は学外の外人教師の官舎にあったのです。それが暴風の時に大枝

が落下したのです。というので根元から切

つちやつたんですよ。それで大イチヨウ
は一本だけになつたんです。

柳田 切つた人足さんが怪我してますよ
ね。祟りかといわれたそうです。

津守 ああ、そうですか。

津山 昔こらは陸軍関係の土地だつた
んでしょ。今、跡見のあたりの古いサクラ
なんか、みな、昔、軍が植えたんですよ。
イチヨウもそのたぐいだつたと思います
よ。

柳田 あの頃植えたんですね。

津山 あの頃からあつたものです。話は
とびますが、グランドの外側に近い方に大
きなクヌギがね、あれは、ひじょうに古い
もんじやないかと思うんですよ。

今井 グランドに近い？

津山 ええ。古い地図を見ると、護国寺
の隠居所になっているんですよ。ですか
ら僕は、その頃の名残りの木じゃないかと

ね。あれは大事にしてやりたいですね。

今井 私どもが学生で入った時に、英語
の曾根保先生がね、まだお若いいらつしや
つて、上級生の四年生に大変きれいな方が
いらっしゃいましてね、その方、曾根先生

の英語のファンでらして、で、そのあたり
で英語の演習かなんかを教えていただいて
……。あれは、『瞑想の木』って言われて
ました。その木の下にベンチが二脚ぐらい
ありました……。それから民家との境のコ

ンクリートのところに萩があつた、そして
その萩をくぐつて……

大槻

あの火薬庫の後つていうのは、の
ちには兵隊などいなくなつてね、葛の蔓が
一面に生い茂つた、行くとね、雉が飛び出
す藪だつたんです。

ニシキモクレン・ケヤキ・ムクエノ
キ・ゲッケイジユ

いましたね……(笑)……鈴虫もいるし、た

まにはクツワ虫もいますけど、松虫のチン
チロリンっていうのを私は初めて、あそこ
でききました。月見の晩は、あの土手に松
虫を聞きに行つた。

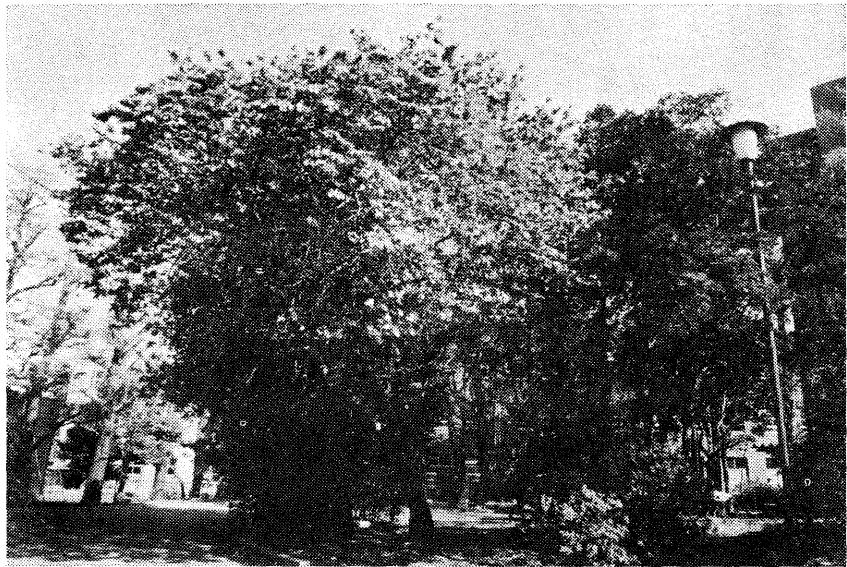
大槻 昭和十三年か十四年頃ですか、今

のお話は。

今井 私が入学した年ですから、昭和十
年ですよ。(笑)

津山 雉はね、時々、護国寺の方から飛
りに土手がありますでしょ。それと同じよ
うな火薬庫の土堤が寄宿舎の外堀りにあり
ました。ですからあの叢には本当に松虫が
たモクレンなんですよね。ニシキモクレン

大きな木で、僕、覚えてるのは、中学
校にぶつかつたブールの角ですね、あそこ
にモクレンがあるでしょう。あれは変わつ



ニシキモクレン月桂樹

つて言うんです。白モクレンと紫モクレンの雑種です。

今井 あのモクレンは保井先生の実験にね……。

津山 そなんです。保井先生が使っている。

大槻 プールぎわの木といえば、ケヤキとムクエノキ

の大木——鳥がムクエノキの実を食べに来て……

津山 ケヤキ……あれはりっぱなものですよ。

大槻 鳥が糞をして、プールが汚くなつてね。

今井 プールのちょっと手前に今は駐車場か何かござ
いますでしょ。あそこのあたりに附属女学校の弓道場が
ありますね。——(本校の方の弓道場は、今の生協の
あるところにございました)そのそばに、ちょっと洒
落た売店がありました。その脇に一本、月桂樹があつて
……

大槻 月桂樹、よかつたね。

今井 それから近くに、アカメガシワが……、アカメ
ガシワの話は後年久米先生がよくしていらっしゃった。(笑)

津守 どういうお話なんですか? (笑)

柳田 大槻先生の武勇談のお話ですか。(笑)

大槻 戦争中、私の研究室では学徒動員でペニシリン
を作つていて、警報が出ても遠くには行けず、窓の下に



プールぎわのケヤキ

防空壕を作つて、そこに逃げこんだんです。壕を作る木がなくて、近くの庭木を切つてね。全部切つたんじやなくて、途中から二本出でいる、片方だけを切つたんです。ところがね。僕が木に登つて鋸でゴシゴシやつている所に下村校長が通りかかつたのです。教護部長が、国有財産を切つたといって、校長が額にすじを立てて怒つてね。飯本先生がなだめて、その場はおさまつたがね。(笑)

津山 まあ、アカメガシワなんて雑木なんですよ、切つても切つても大丈夫なんですよ。(笑) 同じ国有財産でもね。東門のイチヨウ並木のうち門衛所に近いところのが枯れ始めましてね。何とかならないかと、専門家を呼んできましたよ。やっぱり皮が剥げて、キノコが出ていた。そして、その人いろいろやつてくれたんですね。だめだったんです。その後わかったことは、地下でガス管からガス洩れしていた

院のところに、ずっとシナの木が一列ありますよね。ですから、キノコがつくっていうのは、第一次の原因じゃないんです。弱つてどうにかなつちやつたから、ついたと。それで昨年の大工事になつたわけですね。あれでまあ、きれいになつた。それからもうひとつね。これは学外のことですけど、桜蔭会館のところにアカガシがあつたんですよ。大きな、こんなに太い木が見事でしたね。

今井 ああ、ございましたね。

津山 あれはね、どうやらもつてたんですけど、とうとう枯れましたね。枯れたんですけど、結局、公害だと思いますね。カシのうちでも、アカガシが一番立派なんですよ。

大槻 アカガシはあまりないんじゃないですか？ シラカシは多いけど。

津山 シラカシは強いですね。アカガシはちょっと弱いんですね。

津守 われは、消えちゃつたんですね。大槻 戦後家政学部増築のとき図書館の庭に移植したんです。今はどうなつたでしょう？ 図書館が、またああいうふうに変わりましたからね。大木の移植には大変苦労したんです。

津守 何本か枯れたのは知つているんですけどね。今、南門のところに二本ほどあります。まだ図書館の方から移植したんでしょうね。図書館のは一応ついたんですけどね。今、南門のところに二本ほどあります。ずいぶん傷んでおりましたけどね。勢いがなかつた。

津山 結局、大学の建物の設営が優先しますね。ですからいつも急に来るわけ、移

植の時期じゃないわけです。ですから移植が非常に金がかかるわけで、あの楷の木がそうでしょ。あの話を大槻先生してくれませんか？いつ頃でしたか？

津山 複葉なんですが、ひとつひとつ的小葉の配列がきちっと、ととのつていません。楷書の楷と関係があるといいます。

大槻 昔の図書館の庭に移植し、さらにあります。大槻 現在の家政学部の所に、コブシがあつたと同じところですね。

津守 今もまだありますか？

今井 新葉は、あれきれいですね。いい色ですね。

津山 先生、それはどうから持つてきました

津山 先生、それはどうから持つてきました

津守 現在の図書館ですか？

大槻 先生はその頃中國の大学と女高師の兼任だったようです。それでね、中国から持参した楷の木は半分は湯島聖堂に、半

大槻 ええ。これは大事にしてくれ、大事にしてくれって先生くり返し言いまして

水の校舎は、湯島のすぐ近くだったんですね。

津山 一度あつちね、園芸場の方にあります。湯島聖堂に植えるのが主な目的で、自分が、ゆくことになった。矢部先生は日清戦争の後、北京の大学に招聘されて当時の清国の植物を調査された方です。その標本は女高師の標本室に残っていました。山東省の主都曲阜にある孔子誕生の地に建てられた孔子の廟の庭に一本の木が、聖木として植えられています。それをね、「楷の木」です。

津山 雄、雌があつて、ここのは雄なん

大槻 昔の図書館が壊された時にね、建築工事の間一時、園芸場にもつていつた。

津山 樹勢がすいぶん弱りましたよ、切りつめて。

大槻 雄花でも見ようと思っているんですけど。

津山 切り込んでいますからね、成長が遅いのかもしませんね。

大槻 女高師の植物学科は、保井先生と、矢部吉祐先生とで担当しておられたんですね。矢部先生が東京文理科大学が出来た年に、そつちに転任になつた。その後任に私が、ゆくことになった。矢部先生は日清戦争の後、北京の大学に招聘されて当時の清国の植物を調査された方です。その標本は女高師の標本室に残っていました。山東省の主都曲阜にある孔子誕生の地に建てられた孔子の廟の庭に一本の木が、聖木として植えられています。それをね、「楷の木」といふんです。

津山 雄、雌があつて、ここのは雄なん

津山 切り込んでいますからね、成長が遅いのかもしませんね。

津山 複葉なんですが、ひとつひとつ的小葉の配列がきちっと、ととのつていません。楷書の楷と関係があるといいます。

大槻 昔の図書館の庭に移植し、さらにあります。大槻 現在の家政学部の所に、コブシがあつたと同じところですね。

津山 切り込んでいますからね、成長が遅いのかもしませんね。

今井 センダン（楷の木かもしれません。私達はセンダンと教えられていまして）があつて、コブシがあつて、長塚節の文章の中のように「早春に咲いて……」ちょうどその花の下にレンガが敷いてあつたんですけど。そのレンガは薄茶色で渡り廊下になつていました。あの廊下を「キャラメル廊下」って。（笑）そのような色と形なんですよね。

津守 それがどこにあつたんですか？

今井 そのキャラメル廊下の外側にコブシがあつたんです。

大槻 その後ですよ、家政学部の大学院が建つ時に邪魔になつて移植した。女高師時代の卒業生はね、みんなのコブシを懐しみますね。

今井 あの廊下を通つて、次に沈丁花の頃ね、そういう毎日を……

大槻 楠の木は、中国の聖木であつて、これがまたイスラエルの聖木なんです。今

ちようどその花の下にレンガが敷いてあつたんですけど。そのレンガは薄茶色で渡り廊下になつていました。あの廊下を「キャラメル廊下」って。（笑）そのような色と形なんですよね。

津守 それがどこにあつたんですか？

今井 そのキャラメル廊下の外側にコブシがあつたんです。

大槻 その後ですよ、家政学部の大学院が建つ時に邪魔になつて移植した。女高師時代の卒業生はね、みんなのコブシを懐しみますね。

今井 あの廊下を通つて、次に沈丁花の頃ね、そういう毎日を……

大槻 楠の木は、中国の聖木であつて、これがまたイスラエルの聖木なんです。今

でもイスラエルの巡礼で、「アブラハムの檜の木」っていう場所があるんですね。今のイスラエルの子孫ですね、これがね、初めてイスラエルに神の命令でやつて来た時、初めてその自分の土地を買いとつた。その場所の名前っていうのは、その檜の木だった。

津山 うちの坊やがね、パケツ一杯とつきました、聞いてはいたけれども、それからあれですね、もとの家政の研究所（食化研）と理学部本館の間に、ユリの木（チューリップの木）がすつと背高く……。あれはだいたい花が高いところしか咲かないわけです。きれいですよ、あの朱黄色を帯びた緑の花。それがちようど理学部一号館の高い所からよく見えるんですよ。

今井 ええ旧食化研の三階のちようど非常階段のまん前にはだからつて、たつていました。そのとき保井先生がね、これはいけない雄だけ選んで植えればよかつたといい出したことを覚えています。理由は幼稚園児がかぶれるんですよ。

津山 うちの坊やがね、パケツ一杯とつきました、聞いてはいたけれども、それからあれですね、もとの家政の研究所（食化研）と理学部本館の間に、ユリの木（チューリップの木）がすつと背高く……。あれはだいたい花が高いところしか咲かないわけです。きれいですよ、あの朱黄色を帯びた緑の花。それがちようど理学部一号館の高い所からよく見えるんですよ。

今井 ええ旧食化研の三階のちようど非常階段のまん前にはだからつて、たつていました。

津山 多くの方は見ていないんですね、それで位じやないと見えませんものね。実は、チューリップ「の木」というのは、ア

メリカのものなんです。中国でも別の種類、シナユリノキが……。僕はこれをこつそり一本あそこに植えてあるんです、あとで見てみましょう。(笑)

シンジュ・サクラ・ツバキ

津守　そして、今の人間文化棟が建つ前、前方が土手でしたよね、あそこで津山先生にネジバナだなんて教えてもらつて……。あそこらへんからずっと護国寺門へ降りていくあたりは、何か昔の風情が残つていましたね。

津山　シンジュがね、あれはりっぱですよ。この木の由来は書いてあるでしょ。「学園だより」22号に、吉松藤子先生が桺(シンジュ)が植えられた背景を書いておられる。落下傘を作るために絹が必要で、発育の速いエリ蚕に目をつけた軍部が、国策研究を依頼してきた。その時エリ蚕の食葉として届けられた桺の苗木が、今に至っているという。——編集部注】

今井　落下傘に必要でシンジュを植えたって、戦争中風船爆弾を思い出しますね。

津山　花は小ぢやくて目立たないんですよ。実が秋に



グランドのサクラ

なると赤っぽい羽のついたものね、あれがとてもいいのですよ。

津守 エキゾチックなんで、日本のものですか？

津山 中国原産です。

津守 それから、護国寺の方へ降りてい
くところにアジサイがすいぶんたくさんあるみたいですけど……。

今井 アジサイは、旧食化研の周囲とか、ブールのそばにも……。

津守 この家政の建て物に沿っても……

津山 大学の構内にはわりと針葉樹を植
えなかつたようですね。女子大ということ
でね。それからもう一つはね、東京にある
女子大には、たいてい桜があるんですね。
ここでは八重桜がグランドの端でしょ。虫
がつくので、やっぱり避けたんじやないか
しら。

今井 あ、先生、八重桜はね、いろいろ
な種類があつたんですよ。鶯金タツキンとか、御衣

香とか……八重桜の代表、牡丹とか……。

津山 今はね、中学校に沿つた所しかな
いでしょ、もっとあつたんですか？

今井 旧体育館、今の理学部の一号館の
ところまでずっと……。

柳田 女高師のあつた、あのお茶の水の
あそこは江戸時代に桜の馬場と呼ばれた地
ですね。それに因んで校章も桜、附属の同

窓会は作楽会ですし、大学は桜蔭会。本学
にとって桜は貴重なシンボルなんですね。

津山 桜で思い出したけど、野口明先生
が寄贈された枝垂桜ね。あちこち移植され
て、大分傷んだり、枯れたりしましたね。

今井 はじめはおばけみたいで、どこが
いいんだろうって。

今井 コンクリートの中で、日照りの時
にムシが出るんですね。

大槻 椿の名所といいたい位、全国の椿
が集められています。

津山 あそこに一つだけ面白いのがね。

屋久島特産のリンゴ椿という、直径六一七
種の実がなるの。それでちょっと日に焼け
てね、リンゴみたいになる。

今井 立派ですよ、僕はいいですよ。
(笑)

今井 今は卒業式の頃、あの中庭に咲い
てているのはいいけど、虫がついてね。

別のものですがどね。やっぱり消毒してい
ますか？

大槻 いま津山先生のいきがかかるとい
る椿がたくさん学園にふえましたね。

今井 生協の下から右にかけての椿もで
すか？

大槻 花期は過ぎたけれども、今日もま
だ咲き残っていますね。

今井 コンクリートの中で、日照りの時
にムシが出るんですね。

津山 あそこに一つだけ面白いのがね。
屋久島特産のリンゴ椿という、直径六一七
種の実がなるの。それでちょっと日に焼け
てね、リンゴみたいになる。

母の故郷⑥

——福永津義・人間とその仕事——

高橋さやか

(V 承前)

「母の歌と愛撫の歌」にフレーベルがとりあげているのは、知らず知らずのうちに母親が子どもの様子——ちょっとした表情や動作に敏感に素早く対応することにかかる、教育上みのがすことのできない深い意味であった。極めて日常的な状態の中で、実は、母親は母親として必要な子に対する思いやりや愛情を、子ども自身に触

発されて開花させるのであり、また、子どもは自分が知らず知らずの中に引き出し高め深め強めている、母の愛情によって守られ導かれ、ますます健全に心身を練習し成長を達成する活動をつづける。母と子は、互いに自分を成長させ高めてゆくための、相手のよりよい能力を引き出し合っており、その相互関係において、より充実した相互のいとなみを発展させつづける。それが、フレーベルが母と子のあり様において直観した教育の奥義とも

いうべき理念であった。……そのように、神が、本能として人間の母と子に与えられた生命の具え、それに目覚め、それを自覚して、生き、生活し、子どもとともに育つ母、——叡智ある母、あれ、とフレーベルは説く。

津義は、「さきにもふれ、また重ねて、いうようであるが」母の本能を叡智に」というフレーベルに、自分の全生活を傾倒する形で共鳴協調した。

津義におけるフレーベル「母の歌と愛撫の歌」——特に「遊びの（愛撫の）歌」にかかる理解と実践のニークなところは、「足をばたばた」「ぱつたりこ坊やがころぶ」をはじめとする一つ一つに、日本的ななえことば、日本流の（津義流の、といつてもよいかと思うが）民謡風わらべ歌風な遊びうたを連繋させ、また、聖書の」とばを連想・引用していることである。

「足をばたばた」

「ぱつたりこ坊やがころぶ」に対応して「びんこびんこ、にんぎにんぎ、ちよちよちよ、あわわ」「かいぐり、かいぐり、とつとの日」の手遊びをあわせ、「あつこんじょ」も関連してよく用いた手あそび歌であったが、終

ぱつたん、おつきして（起き上つて）ねんねして」「高い高い、すとーん（低い）」「あんよは上手、ここまでおいで、おころびお下手、どんどん来やれ」と動作あそびに入つてゆく。

「糲搗り すりよ、糲やまだすれんか糠こそ 出來た、

「箕を持て來い、炊て食わそ」

「ぎーつこんこ ぱつこんこ

爺に一反 織つて着しょ

婆に一反 織つて着しょ」

は、筆者が幼いころ遊んでもらい聞かせてもらつた、多分熊本の民謡である。ぎーつこんばつたん、の動作にあわせたものであった。

「ずいづい ずつころばし じまみそずい 茶壺に追われて とつびんしやん ぬけたら どんどんしょ 俵の鼠が 米喰つて ちゅう ちゅう ちゅう ちゅう お父さんがよんでも お母さんのがよんでも 行きっこなあしょ も関連してよく用いた手あそび歌であったが、終

りの詞は甚だ氣に入らず 「父さんが呼んだら 母さん
がよんだら すぐに行くよ」 どうたい直したものであ
つた。同様の手あそび歌に

「一里けんじょ 二けんじょ 三けんじょ 四けんじょ
しけんま ほたたの のりこまの うえに あめ牛 毛^け
牛 猿さが杖ひいて ぎりとひうて こるひけは こる
ひけ」という、ふしきな、大部分意味不明の（筆者にと
つては）歌があつた。今思うと、一里けんじょ、は見所
または検所、ではないかと思う。「しけんま ほたたの
のりこまの うえに」はどうしてもわからない。あめ牛
毛牛は赤牛——飴色（べつこうあめのような茶色）の牛
のような気分でうたつていた。猿さが杖ひいて、はいい
として、ぎりというて、はかけ声ででもあろうか、こる
ひけ、は熊本弁の音便で、これ引け、に違いない。遊び
方は要するにずいずいころばしと同様である。軽く
握ったこぶしを、人差指と拇指で小さく円形に空けた方
を上に、輪になつた数人が両手を出して、一人が指で、
ちよいちよいと突いてゆく。うたの最後に急にこよしを

握りしめる形で、突いて来た指を捕えるのと、握りしめ
られる直前に素早くひっこめると、短い間のやりとり
の呼吸を楽しむ。「ちよいちよい、あわわ、かいぐりか
いぐり、ととのの目」「はなはなはな……目（耳、口、
頭、頸、おでこ、等どこでもよい）」からやがて「ずい
ずいずいころばし」「一里けんじょ」に移り、時には一
がさした、二がさした、三がさした、……と手の甲を
代り番に軽くつまんで、「ハ（蜂）」がさした！ ぶん／＼
／＼／＼と、「ハ」に当つた子が皆を強くつねろうと
追いかける、皆はぱつと手をひっこめて逃げる、という
遊びもあつた。

これらの遊びには、手足を動かすこと——屈伸運動
力、上下する運動、当つて跳ね返る運動、引きあつたり
放したりする運動、などが含まれている。

「いない、いない、ぱあ」「見えた、見えた」の遊びも、
さらには四、五歳児に遊ばれる「ハンカチ取り」「子と
る子とる」「天神さまの細道」など、引っぱりっこを伴
う遊びも、「足をばたばた」「ばつたりこ坊やがころぶ」

の延長線上の遊びとして考えられていたようである。

子どもの内発的な衝動に対応し、手ごたえ（足のふみごたえ、蹴りごたえ）のある刺激を与える母の動きが、子どもに快よい反復運動をもたらし、子どもの活動を一層力強く発展させる。

幼いころ、遊んでもらっていて、勿論これらの遊びのもう意味に気付いたわけはないし、遊びも、唱えことばや民謡も、すでに半ば茫々とおぼろに霞む記憶の彼方に溶け去るうとするようだが、それでもなお、これらに語った「家庭及び両親教育」——そのテキストに「母の歌と遊びとは、意外に鮮やかに、津義が学生や母親たちに語った「家庭及び両親教育」——そのテキストに「母の歌と愛撫の歌」を用いた。その講義のことば、声音に重なり合い、次第に確実に新鮮にひびいてくるのである。

この、母と子の遊びの、最初の一と二に、津義は（フレーベルに拠って）、教育における母子関係の、一生を通じての基本原則を見出している、と言えるようである。

子の動作、子の生活活動は、ほんの、全く何気ないようなく単純なものであっても、生命を維持し、生命を成長発展させる意義のこもったものであり、それを見守り、支え、対応し、対抗する相手となる母は、どこまでも、子ども自身が自分の力を發揮することによって、子ども自身が自分の力を発見し、試し、一つずつ段階をふみ越えふみ上つてゆくことを、その時その時の子どもたちに相応しく保障するものである。母は、子どもの自由をどこまでも認めながら、しかも、その自分が、彼自身を常に力強く（時に事に当り倒れ挫折することがあつても）立ち直らせ立ち上らせ、再び確かな歩み・働きをつづけるように見守り支えるものである。その、認め、見守り、支えるいとなみが、「足をばたばた」「ぱつたりこ坊やがころぶ」から誘い出される一連の遊びの中に、具体的に予見され、予習されている。

「もうない（おしまい）」も、「味の歌」も「鳩をよべ」「小さじ魚」「花かご」「小さな橋」等々、どれ一つをとっても、重要な、意義深い、……そうでないものはない

けれども、何といっても、この母と子の遊びの最初に掲げられている遊びこそは、（それは同時に母子のいとなみの出発点をなす遊び、でもあるが）母に母の使命を根づかせ培うところの、そういう意味で全篇の集約をなすもの、といえる。——そう、津義はうけとめていた、と見て間違つてはいないと思う。津義はさらに、このところの釈義をのべながら、次のような引用も加えた。

「いざこに在るとても、母見て居申す」ということばが、江戸に遊学した本居宣長にその母が書き与えた書状の中にある、と言い、一人の日本の母の、したたかな母ごころを、親しみをこめて誇りやかに、——フレーベルの要望する母のあり様をすでに実現している一例として、その一例を自分の同國の同性に見出すよろこびを以て、津義は語つたものである。

ともあれ、津義の、この「母と子の遊び」の最初の部分は、津義が最も多くくり返し、くり返す度に熱をこめて語りつづけたものであった。

愛の使徒ヨハネのことばを、くり返し読みたいと思ひます。

「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。わたしたちが神を愛したことではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、み子をおつかわしになった。ここに愛がある。」

「主は、わたしのためにいのちを捨てて下さった。それによって愛ということを知つた。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互いに愛しあうべきである」（ヨハネの第一の手紙より）

愛されるよろこびは、愛するよろこびと育ち、感謝されるうれしさは、感謝を捧げるたのしさを知らせてくれます。愛し愛され、感謝し感謝される生活、その中にはおのずと奉仕と希望の生活が生れて参りましょ。神なる父は、人の子たちが、そのような至幸な生活をもつようと「愛育の本能」「いとおしと思ふ真

情」を、創造の日に、母であるべきひと、に賦与されたのだと、フレーベルは信じたのです。

フレーベルはこの項にそえた図解で、海や山、野原や川辺、自然の世界に出て行って、子どもたちと一緒にできるだけ多く遊ぶように、とすすめています。

自然の中で、深々と呼吸し、のびのびと動き、思う存分開放感を楽しむ、というのは、必ずしも子どもだけではなく、若者も壮年も老人も、人皆同じと言えましょう。このような無心な、何の構えもない遊楽、うごきの中で、人は、その人その人の、その時その時の身体、知識、精神、心情のありのまま（眞実）な状態を赤裸々に語り表現するものです。

このような時、このような事に、心をとめて見守り、思いめぐらす母・保育教育者たちは、或いは傍観者のように、或いは子どもと一緒に遊び呆けているよう、していながら、よく対象にきき、対象を知る叡智と洞察の力を養われ、人それぞれにふさわしい教

育をしそえ木になることができるのだ、とフレーベルは言うのです。

昨日の子ども、今日の子どもの、自由で自然な遊び、必然的な生活活動を通して、明日の子どもの必要、要求に応えることができる、そしてはじめて、親も教育者も、自分の^{いぶた}铸型に子ども・対象をはめこむのではなく、対象それに賦与された生命の本質、その持ち味、特長を生かすことができるのです。

人が、それぞれにふさわしく生きること、それが、それぞれに異なる計画を立て、異なる賜物を与えられた創造者のよろこびでもあり、子なる人々の全き幸福でもある、と、これは彼の教育の信念とも考えられます。そして、自然の事物と事象、それは創造の主であり、父であられる神が、被造物——生みの子たち——を、いとおしみそえ立て給うに最もふさわしい場と教材とを、自らのみ手で設定し給うた教室、というのでありますようか。

「もちろんの天は神の栄光をあらはし、

おおぞらはみ手のわざをしめす

この日ことばをかの日につたへ

このよ知識をかの夜におくる

語らず言はず その声きこえざるに

そのひびきは全地にあまねく

そのことばは地のはてにまで及ぶ

神はかしこに帷帳を日のために設け給へり

日は新郎が祝いの殿を出るが如く

勇士がきそひ走るをよろこぶに似たり

そのいでたつや天の涯よりし

そのめぐり行くや天のはてにいたる

ものとして

そのあたたまりをこうぶらざるはなし

神の法は全くして靈魂を生きかへらしめ

神の証詞はかたくして

愚なるものを智からしむ

神の訓論はなほくして心をよろこばしめ

神の戒命はきよくして

眼をあきらかならしむ

たれか おのれの過失あやまちを知り得んや

願はくは我をくれたる愆たぶより解き放ち給へ

願はくはなんじの僕しもべをひきとめて

故意なる罪を犯さしめず

それをわが主たりしめ給ふなけれ

さればわれ玷きずなきものとなりて

大いなる愆をまぬかるゝを得ん

神 わが磐いわ わが贖あがなひ主よ

わが口のことばわが心のおもひ

なんじの前に

悦ばるゝことを得しめ給へ

(詩篇一九)

☆ ☆

津義は「足をばたばた」の解説の終りを、このように

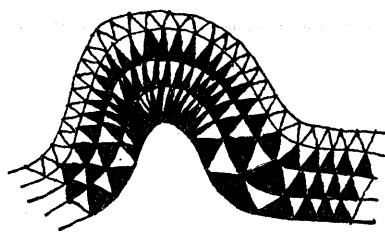
記述している。

津義にとって、「母の歌、母と子の遊び」は、最早実践保育のテキスト、でさえもなく生活活動そのもの、彼フレーベルの教育哲学の生活化、聖書の生活化、をちりばめた日常的現実の形象化にはかならなかつた。

「母と子の遊び」において、津義は、フレーベルと共に、フレーベルその人と共同して『子らに生き』たのである。

フレーベルが「宗教教育家」としばくいわれていることについて、一般には、普遍的な意味での教育家ではなく特異な、獨得なあり方で宗教に著しく傾斜した教育家である、というようなうけとられ方があるのに對し、津義は、宗教教育家こそ眞の教育家である、との思いで心からな讃嘆と親愛とをよせていた。津義自身、フレーベルに極めて近い、同質、とも言えるであろう宗教教育家であったのである。

(西南女学院)



近代短歌に現われた子ども

(五)

(9) 土岐善麿



大塚
雅彦

土岐善麿といえば、若き日にローマ字の歌集を発行したり、三行書きの新表記の短歌で啄木に影響を与えたたり、その晩年の啄木と交わり「樹木と果実」の発刊と共に計画したり、自らの生家の浅草・等光寺で啄木の葬式をしてやったり、また、最初の啄木全集の刊行に力をつくし、啄木を世に出した人物の一人として、忘れてならない存在であるが、明治十八年に宗門に生まれ、昭和五十五年四月に逝去するまで、実に九十五歳の長寿を保つた。その間、八面六臂の活躍をし、「一芸万芸に通ず」るの感を与えた多力者であつた。すなわち、短歌はもちろん、田安宗武（学位論文）や京極為兼等の研究

家としての国文学の業績、国語審議会々長の重責、新作用による能楽界への寄与、杜甫研究や日中交流運動の功績、エスペラントへの貢献等々、枚挙にいとまがない。

私は近代短歌史はもちろん、近代文化史にのこる此の巨星の晩年を「生きている古典」というような思いでいつも眺めていた。残念ながらその全集は未だ出ていないが、全集を編むとすれば老大なものになるであろう。著書だけでも百五十冊を越えるからである。

私は生前の土岐博士に何回かお逢いしたことがある。

最初は日比谷図書館館長をして居られた頃で、同館内で逢った。いかにも若々しい風貌と、都会人らしいキビキビした話しぶりが印象的であった。また、私たち「平出修研究会」会員が『定本平出修集』(春秋社)を編纂刊行した際、朝日新聞社講堂で記念講演会を催したが、講師の一人として博士をお願いし、その折、楽屋でお話をきいた。歯切れのいい話術や、知的なスマートさが、さわやかだった。その後、博士に私淑する冷水茂太氏や中野菊夫氏らが企画者となつて、博士を敬愛する人々が博

士の誕生日に集まつてお話を聴く「周辺の会」というのが毎年催され、私も数回参加した。かなりの高齢であつたのに、博士はいつも得意のジョークを連発して人々を笑わせ、後進に知的刺激を与え、いかにも自由人、都会的な知識人としての相貌をいつまでも見させていた。それは長い間、読売新聞社や朝日新聞社のジャーナリストをしていた経歴から身につけたものもあつたろうし、有名歌人なのに結社も持たず自主独往の歌人で終始した潔癖さや、常に新しいものや未知のものに挑む進歩的精神や、学問や芸術を深く愛するインテリジエンスの持主だったからであろう。私の私的回想をふくめて駄文を連ねたが、歌人としての幅の広さ学識の深さや清新さを常に持っていた点で近代歌人として珍らしいタイプであった

点を、強調したかったためである。その老大な業績のうち、「メインを為すものはやはり短歌」(冷水茂太『斜面慕情』昭57・6)であろう。

①子をつれて、日ごとに遊ぶ停車場^{ていしゃじょう}の広場の草も、黄

②なれの父のこの臆病に似るなかれ、このあきらめをまぬることながれ。

①は歌集『黄昏に』（明治45刊）所収。この歌集は三行書きで、すべて一首の中に句読点を施している。この歌は最初の「ソファの上」という小題のある部分の中にある。この頃善磨は哀果と号していたが、明治四十二年二月、中村鷹子と恋愛結婚、十月に読売新聞記者となり、下谷区北稲荷町に住んだ。翌四十三年六月に長女サチ子が生れ、家が手ぜまになったので、十二月芝区浜松町一丁目十五に家を建てて移った。ここは浜松町の駅から四、五百メートルのところで駅に近く、汽車が通ると家はかすかに揺れた。鉄道をはさんで東側は、浜松町から品川にかけてまだ海岸だった。「新聞記者の慌しい日々の暮しの中で、わずかの時間に、長女をつれて駅までの散歩をしたのである」（武川忠一『土岐善磨』昭55・10）。「哀果は日ごとに大きくなつてゆくはじめての女の子が可愛いくてならなかつた。毎日のように出勤前や勤めから帰つてからのひとときを、その娘のサチ子を抱い

て、駅前の広場に、汽車を見せにでかけるのだつた」（冷水茂太『土岐善磨の歌』昭49・3）と、諸家の「鑑賞する通りであろう。忙しく疲れる勤務の日々に、子供にサービスする若い都会サラリーマンの生態は今も昔も変わらないが、この歌は同時に、そのような繁忙の中に身を置く自らへの慰めと愛惜の思いもこもつていよう。また、明治末葉の頃の浜松町駅周辺を想わせて、味わい深い。なお、この歌の後の方に「わが子と、拾ひては投ぐる十月の、こころしつけき路の石かな。」「むすめよ。この黄昏の落葉を父は焚くべし。燐寸^{たそがれ}をもてこよ。」の如く子どもと遊ぶ歌や、「夜おそく、家にかへれば、死ぬばかり、子どもの泣けり。もの言はず、寝る。」「わがむすめ、やつと眠れば、家は、みな、爪先のみの、秋のゆふぐれ。」の如く、よく泣く女兒を気づかい、足音をしのばせていた若い著者と夫人の微笑ましい生活ぶりを偲ばせる作品がある。

②は自選歌集『土岐哀果集』（大正6年刊）に収められているが、歌の製作は大正四年始である。やはり三行

書きで、句読点がある。この年、一月三日に長男健児が

生れたが、三番目の子で始めての男子だったので、哀果の喜びは大きかった。「男子生る」の小題にもその歓喜が現われている。この歌の前に「健かなれ、——ただ健かにあるのみに、なんにもせざる父には似るな。」があり、

併せて味わえる。生れた男児をただよろこぶだけでなく自己批判をふくめてこのように詠じてはいるのは「社会と

自己」思想と感情、理論と実行などの間の矛盾にさらさされている自分の姿（武川忠一、前掲書）を見つめているからといえる。具体的にも、「前年の大正三年五月号の『生活と芸術』誌上で、哀果は仲間の大杉栄から、その社会主義者としての行動的臆病さを痛烈に批判されたことがあった……ので、自らも知識書斎人のソシアリストの弱さとして自認していることであった」（冷水、前掲書）ため、子どもにはもつと強くなつてほし、とね思へるぞ、子よ。によく比較されて論じられる。なお前

掲『黄昏に』の中に「革命を友とかたりつ、妻と子にみやげを買ひて、家にかへりぬ」という歌が収められているが、この「友」とは石川啄木のことである。

③そのひとみ親のすがたをはなだじとひた寄り仰ぐあはれ子らの眼

④子らはみな学校へゆき去りにけり家のまへなるわか葉の路を

③④共に歌集『緑の斜面』（大正13年刊）所収。③は

有名な大正十二年九月一日の関東大震災の際の歌であり「地上」とする二百二十余首の震災関係作品の中の一首である。この歌の次に「背丈にしあまる布団をかいばさみより添ふ子らのうなじを抱く」という作もある。恐怖に脅えつつ必死の眼で親の姿を見失うまいと寄り仰ぐ子どもらの姿を、③はリアルに描いてはいる。善磨はこの日、出勤途中で地震に遭遇し、社へかけつけた後、急いで家に戻った。火の手が迫ったので家族を連れて芝公園に避難したが、その夜、浜松町の彼の家は焼けたという。大震災をうたつた歌人は少なくないが、善磨の大作

はクロニクル的なものとしても価値がある。『緑の斜面』の終りの方には、避難後、一時芝白金今里町に仮寓、更に下目黒に新居を構えて移り、ようやく平安を得て、明るい心も戻ったことを想わせる作品もある。(4)はその頃の作品で、「郊外新居」の小題のある一連の中の一曲。「学校のかばん背におひて門田みち蛙つかまへゐる男の子なり」という歌もあり、その頃、下目黒辺もこんな風景の見られる郊外だったのである。

(10) 蓬田空穂

空穂は本名通治、明治十年、歌人王国ともいすべき信

州に生まれた。松本市の近郊である(市内、和田区)。松本中学を経て東京専門学校(後の早大)卒。新聞記者や雑誌記者を経て、早大教授となり停年まで長く勤めた。昭和四十二年没、九十一歳。若き日に「文章」に短歌を投稿し、選者の与謝野鉄幹に認められ、新詩社々友となり、「明星」に短歌や詩を発表する。間もなく退社

し、明治三十八年「十月会」を結成、大正三年には歌誌「国民文学」を創刊した(この雑誌は今日まで続いている)。処女詩歌集『まひる野』(明治38)を始め、生涯に三十冊近い歌集をのこし、また歌論・歌話も多く、国文学者としての研究書、評訳書も少なくない。その全業績は計二十八巻・別冊一巻の大きな全集(角川書店——昭和40~43)に収められている。その歌風は空穂調といわれる独自の風格を持ち、いわゆる境涯詠にユニークなものを樹立したが、晩年まで生命の深さをみつめる旺盛な創作力を示した作家であった。

①その子等に捕へられむと母が魂蟹たまはと成りて夜を来るらし

②米高く買ひはかぬなり我が子等は大河の辺に行きて水飲め

③その母に生き写しなる女の童今は忘れて母を知らず

④鳴く蟬を手握りもちてその頭あたまをりを見つつ童走わらはせせ

来る

⑤死ねる子を箱にをさめて親の名をねんごろに書きて路に棄ててあり

⑥剃りかけの頭をしたる弟童兄弟に添ひて巷に遊ぶ

①は歌集『土を眺めて』(大正7刊)所収。空穂は家族運が悪く、明治四十年に最初の妻藤野と結婚し、第一章一郎(後の早大名誉教授、国文学者)、ふみ、なつ(乳児で死亡)の一男二女をあげたが、この妻は大正六年に僅か三十歳で死去した(後に亡妻の妹操と再婚して次男茂二郎を生むが、この後妻とは離婚する。なお、茂二郎は後にソ連で戦病死)。そんなわけで、最初の妻に死なれて困却した空穂は、九歳と四歳の長男長女を、しばらく信州の母方の祖父母に預け、東京でひとり暮らしをした。そんな折、妻の生家にこの二児を訪れた時の作品が①である。妻の実家は東筑摩郡島立村(現松本市)で空穂の郷里の隣村であるが、「高納と呼ばれる川がある」となし怖ろしい川について。……父が東京から来て、大喜びの幼児たちは、夜も日も遊び相手にし、螢取りに

せがんで・この川の方面へいった」(窪田章一郎『窪田空穂』昭55・8)という。「母を亡くした子供たちのわれさ、いとしさを深く胸に刻みつけている作者は、それ以上に亡き妻の魂は子供たちを思いやっているにちがいないと思つてゐる。その痛切な心情がこういう歌をなさせた」(木俣修『近代短歌の鑑賞と批評』昭39・11)というべく、その亡妻の魂が螢となつて闇を渡つてくるという発想はまことに絶妙で、心をうたれる。この時の歌にはなお「悲しまば母は歎かむまことにも物を思はで遊びね我が兒」「越えかぬる田川越さすと搔き抱き飛べば愛しき吾が子なるかも」等があり、父親としての作者の心情がじんじんといふ。ちなみ此の『土を眺めて』は長歌が多い歌集で、妻が臨終の床で愛児たちに無限の思いをのこして死んでゆく場面を描く「子等との別れ」の長歌の如きは、涙なくしては読み得ない。これ以後、空穂はさかんに長歌をつくるが、彼の長歌は近代歌人の中でも特に定評がある。

②は歌集『朴の葉』(大正9刊)所収。「物価高し」と

題した五首連作中の一曲。大正七年八月、米価が暴騰し全国に米騒動が起り、ストライキが続き、失業者は激増するという事態に陥った。文筆生活者の作者も生計苦しく、高値の米を買いかねるような状況であった。この歌の下句は思い切った表現で、作者のやりどころない悲憤を示しているが、この歌は、愛する子供たちにも充分に飯を食わしてやれないという作者のせつない愛情を録すると共に、当時の不安な世相を示したという歴史的価値もある。統いて「わが家は菓子買ひ難し今よりはわれも食はじ子らも堪へて居よ」という歌もある。

③は歌集『鏡葉』(大正15刊)所収。「子と語りて」と詞書のある五首のはじめの一曲。大正十年作であるから、この「女の童」は当時数え年九歳になっていた長女ふみであろう。満四歳にも達していないうちに母を亡くした幼い娘が、その亡母に「生き写し」なのも哀れを誘うが、その娘と語り合っていると、母の記憶がすでにないのがわかり、一層胸をつかれる、という歌であろう。

「この子ゆゑ命懸けにし母なりと我は知れれど子は知ら

ずけり」という歌が続いているが、命をかけて子を愛した母、その母を忘れてすぐすくと育つ子、そして親子のそのような関係のことをいいようのない寂しさで思つてゐる作者——まことに心境小説の一節は想起させるような味わい深い作品である。

④も同じく『鏡葉』所収。「盛夏のころに」中の一首。じいじい鳴く蝉をしっかりと手の中に握り持つて走つてくる童児が、ときどき立ちどまって、その蝉の頭をのぞき込んでいる。という路上の所見である。緊張している子供の姿態が眼に見えるような巧みな描写で、しかもユーモアがにじんでいる微笑ましい作品だ。じりじりと照りつける夏、真黒い陽焼けの顔をしてランニングシャツ一枚か、あるいは裸で走つくる腕白坊主、その手の中で必死に鳴いている蝉のけたたましい声……それはわれわれ自身が少年の日に自らも経験した世界であり、読者はこの歌に幼き日の郷愁をよび起されるのではあるまい。

『鏡葉』にはまた⑤のような作品もある。これは前出し

た善磨の作品と同じく大正十二年の関東大震災を詠じたものである。大震災をうたった歌人はこの二人の他にも島木赤彦、中村憲吉、高田浪吉等数多くあるが、『鏡葉』には「震災の歌五十首があり、もつとも多く作をとどめた歌人に數えられている」（窪田章一郎、前掲書）。この歌は「丸の内」と題した二首中の一首。空穂の震災詠のはじめにある詞書によると、當時小石川雜司ヶ谷に住んでいた彼の家は九月一日の大震災には幸いにも被害を免かれたが、二日、震動のおとろえたのを幸いに、先ず神田猿楽町に古書店を営んでいた甥の家あとを見に赴いた、という。しかし、それから見聞したのは物凄い災害の光景ばかりで、無惨な状況にきもを潰したのである。

⑤もその一つで、意味は明瞭であるが、まことに悲惨だ。私は今度の大戦に中国大陸で捕虜となり、昭和二十一年復員の途中、旧満洲の曠野を徒步で歩きつつ、子を失いその子を野に埋めて来た主婦たちと一緒にになり、悲痛なその体験談に胸うたれたが、⑤の歌を読むとそれを思い出す。このほか、空穂の震災歌の中で子供を詠じた

ものに「死ねる子を親の捨てたりみ濠ほりばた柳青くしてすずしきところ」「あぶ向きて浮ぶは男うつ伏してしづむは女わらわさきはその子か」「負へる子に水飲ませんとする女手のわななくにみなこぼしたり」等がある。⑥は歌集『青朽葉』（昭和4刊）所収。「越ヶ谷の町に行きて」と題した、街頭スケッチである。この頃の子供はバリカンで頭を刈らずに、カミソリで青坊主のように剃られる者が多かった。ところが兄の少年が遊んでいるため、弟が剃りかけのまま飛び出して来たのか、その珍妙な頭のままで、巷に兄と遊んでいるのである。二人の童児を描いてユーモア溢れる作品であろう。私なども子供の頃、剃られはしなかつたが親にバリカンで頭を刈つてもらつて、半刈りのまま飛び出した記憶があり、この⑥もまた郷愁をそそられる名作である。

（お茶の水女子大学）

ブリューゲルの「子供の遊戯」 8

——竹馬ハラマから独楽回ソメード——



森 洋 子

46 竹馬（低ローハ） ハラマ Op kleine Stelten loopen

（図一）

50 の「竹馬（高タカハ） ハラマ」を参照。

47 盲ムツムツ鬼のスリッペスリッペ ベルフ Blindenhoedie met

Stofkentrek (図八)

供が鬼となる。

15 の「皿隠ハコヒし鬼ハシビロコ」及び 45 の「盲ムツムツの鍋たたかハチカラハシ」

なども共に、この遊戯の「盲ムツムツの鬼」のヴァリエーションであるといふべきよう。帽子や目隠しされた少年が棒の先に紐をつけて、スリッペとか雑巾、ざら布などを棒に縛つて遊具とするのであった。

る。元気のよい子供はスリッペを引張ろうとして、鬼を

からから。そこで彼は棒を振り回して、彼らを追い払う。他方、臆病者の子供たちはスリッペに当らないうちに、素早く逃げる。したがって、体にスリッペが当った子供が鬼となる。

なおドイツでは前世紀まやりの遊戯は Plumpsack として、人気のあるグループ遊戯のひとつだった。それは結び目のあるハンカチ、帽子、靴、木片などを紐で棒に

48 ひと山に命中させる Naar den Torre schieten' 投げ
むかへて投げる

(図3)



図1 ブリューゲル
「竹馬（低い）ごっこ」
(「子供の遊戯」の部分⑨)



図2 ブリューゲル「盲ら鬼のスリッパとり」
(「子供の遊戯」の部分⑪)

三人の子どもが地面の上に何か丸いものを下に三個、
上に一個重ねて、山を作り、それを一定の距離から、同種
のものを投げて、山を崩して遊んでくる。ド・マイヤーは
遊具として、じ
やがいもをあげ
ているが、これ
が南アメリカか
ら北ヨーロッパ
に伝播したのは
一五六五年頃と
いわれるので、
時期的に少し早
すぎるようと思
われる (ブリュ
ーゲルの「子供



図3 ブリューゲル「ひと山に命中させる」
(「子供の遊戯」の部分⑩)

遊戯」は一五六〇年の制作）。すると、ナッシ、ボール、

おはじき、石など、丸くて固いものなら、どんな対象で

も遊具となりえたであろう。また子供たちはこれを「塔

崩し」として遊んだらしい。もし塔がくずれたら、四個

とも、その子供の所有となるが、失敗したら、逆に四個

与えねばならない。

キリヤーンの辞書にも「*タムラ作る*」hoopkens settēnとか「仔馬に当てる」peerdekken schieten、「ナッシで倒す」velden oft vellen met noten ʌ̄sより表現がある。

またラブナーは「城攻め」au chasteletと述べている。
一六三二年の無名のドイツ詩人の歌に「*山を壊す*」とい
る。

「あそひでナッシで遊ぶ子供たちは、

やがて大きなひと山の周りに集まる。

ひとりが置き、他がねらう。

第三の子がそこへ投げ、

第四の子が失敗する。

何人かは静かに立ち、他は走る。

笑う子もいれば、喧嘩する子もいる。

そんな風にして世界が回る。

ひとりが起き、他は倒れる。

ひとりが城や町を築き、

他はいかにしてそれを壊すかを考え

^{注2} 考えている。」

フランドルの詩人ジャック・ステラは『子供の遊戯と
楽しみ』(図4 一六五七年) の中で、同じ遊びをこうつ



図4 クローディン・ブゾネ・ステラ
「ひと山に命中させる」(ジャック・
ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657
年より) 銅版画

ランス語で語つてゐる。

「彼らの間でお城と呼んでゐるあの山のどれかひひりを、地面に倒そらへ。あの可愛い子供たちがじつと狙つてゐる山であつてもかまわん。

かくして仲良しの戦争^{社3}といふやうだ。

かくだけ地面に倒せよ」

ぐるぐる廻り Ronddraaien (図5)

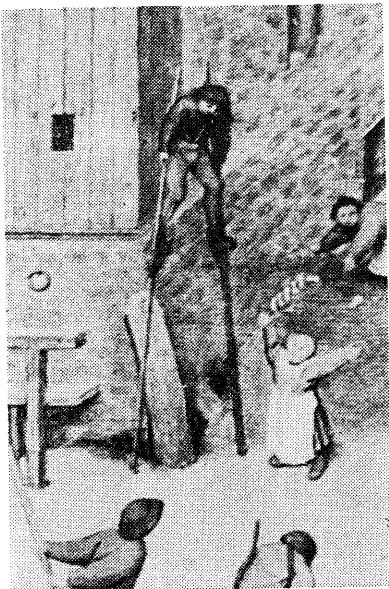


図5 ブリューゲル「ぐるぐる廻り」
「竹馬(高い)ごっこ」(「子供の遊戯」の部分④⑤)

50 竹馬 (高さ) IJ H IJ Staan op hooge Stelten (図6)

竹馬の遊びはやぢに古代ギリシャ時代^{社4}は kaltbathra ローマ時代やは grallae などと知られてゐる。中世の木デルトノムでは stelte, schaetse などとされていたが、これは「松葉杖」といふ表現にも使われていた。竹馬の材料はヨーロッペの場合、固い棒や赤楊木で作られる。50の竹馬の高さは、46のそれより約二倍以上であるが、この少年はおそらく近くの長椅子の背かい、足をかけたのであらうか。子供の背の高さや熟練度によつて異なるが、下から五〇センチないしそれ以上の高さに足台(鷺足)、オランダ語の Mik がつけられる。しかし台があまりにも鋭角であると、足がその間にはもまれて

青い服の、白いプロン姿の小さな女の子が、両手を挙げて、鳥の真似をして目がまわるまゝ、ぐるぐる回る。彼女はすぐ前方の、高い竹馬の男の子を感じしてみていらののだ、といふ説^{社4}もあるが、その視線の方向か、この鳥^{社3}といふをしたのだから。

平均を失ない、十分スピードを出すことができなくなる。それだけでなく、重心を失い、前へ倒れる危険さえも生じる。ゆえに、竹馬を作る場合、高さや台の角度やその位置など、十分に研究しなければならないのである。

ところで画面をよく注意すると、竹馬の乗り方がわが国とは違うことに気がつく。十七世紀の版画(図7、8)やタイル画(図9)、十九世紀の実物写真(図10)を見ても、フランドルやオランダでは、足台はそれぞれの棒の内側につけられ、子供たちはかなり低い、ももの位置で棒を握っている。この方法は今日でも変りなく、毎年七月上旬に開催されるブリュッセルでの有名なオメハング祭(グラン・プラス広場で開催)でも、全く同じ乗り方での竹馬のデモンストレーションが行なわれる。

竹馬は元来、遊具というよりは大人の生活用具であった。例えば沼地を渡らねばならないとき、また羊飼いが遠方を見渡すときに竹馬を利用した。大市などの「竹馬競技」も、祝祭の人気ゲームのひとつであった。いや今

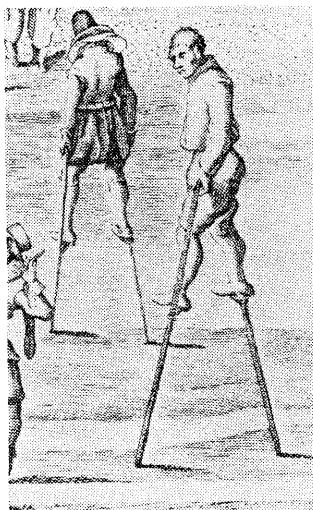


図7 「竹馬ごっこ」
(J・カツ「道徳と愛の像」
1622年より) 銅版画

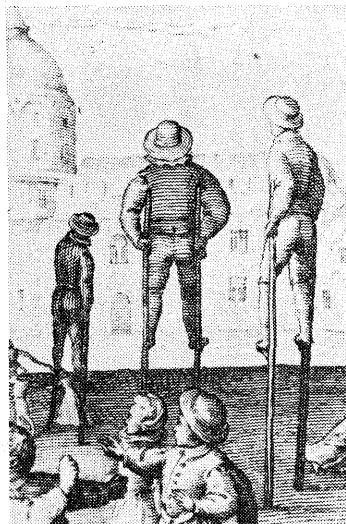


図6 マルテン・ド・ヴォス
「竹馬ごっこ」(「幼年期」の部分)
16世紀後半 銅版画

日でもフランスの西南部の砂丘地帯ランド地方では、羊飼いが竹馬に乗って羊の番をする習慣が残っている。



図9 「竹馬ごっこ」オランダの版画の部分 18世紀

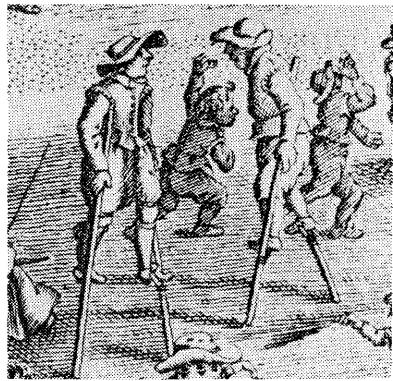


図8 E・シリマン「竹馬ごっこ」(J・カット『結婚について』1642年より) 銅版画

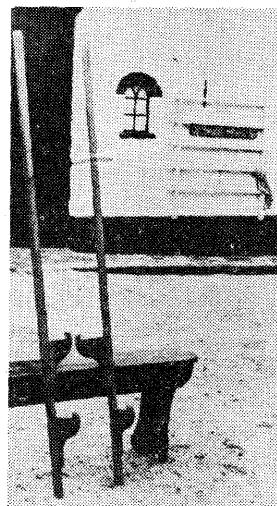


図10 「竹馬」世紀高さ175cm 足台の高さ30cm, 58cm

馬に乗つてい
る。その子はヴ
アルター・フォ
ン・ヴュイルといつて、小川の中に小さな貝殻をみつ
け、竹馬でそれを押しやる……。^{注5}

ところが十七世紀になると、前述のようにカッツハの「竹馬」に人生への教訓を比喩している。

「竹馬で歩く子供たちはまさしく怠かさの姿である。われわれは本当の姿よりも、大低、高くみせよう試み^{注6}。」

51 ぶらやがりij ij Aan de Balk tuimelen (図11)

市庁舎風な大きな建物の前にベンチがあり、その側に横木のある柵が置かれている。これはブリューゲルの時代、市場などではいたるところにみられる馬を繋ぐ柵であるが、それは子供たちがぶらやがつたり、その上に乗つたりする格好の遊具であった。この絵でも二人の少年のうち、ひとりは両足を交差させて

ぶらさがり、大きなカバンが落ちかかっている。他の少年ははずみをつけ、一回転しようとしている。

52 棒立てごっこ Evenwicht (図12)

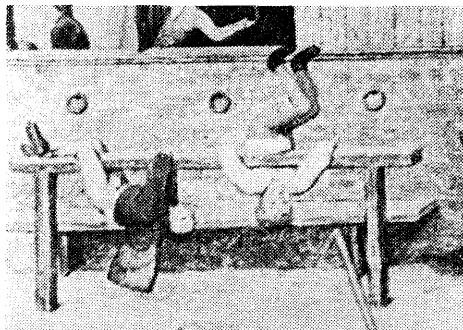


図11 ブリューゲル「ぶらさがりごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑩)

大きな建物の玄関口で、女の子が掃木を右手の人差し指にのせ、棒立て遊びをしている。世界中のどの国の子供も考える遊びだが、棒は掃木だったり、老人の杖だったり、また指の代わりに掌、鼻、額、靴の先などにのせてバランスを保つ。この遊びの時間は比較的短いし、またとくに規則というのもなく、独り遊びの場合も少なくない。しか

し二人で交代しながら、どちらが長く垂直を保つかを競うこともある。オランダのタイル画にはこうした二通りの情景がみられる(図13、14)。

53 子牛の脂または袋かつぎijij Zak-dragen (図15)



図12 ブリューゲル「棒立てごっこ」(「子供の遊戯」部分⑫)

同じ建物の入口の階段に、七、八人の子供が坐り、ひとりの女の子が近づくのを見ている。彼女は同じ背丈位の男の子を背負って、よろよろとこのグループのところ

(図15)

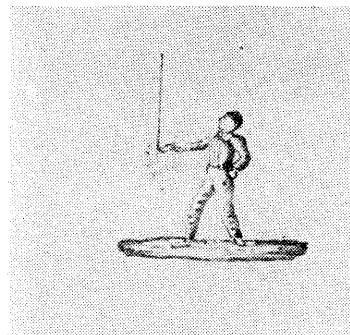


図14 「棒立てごっこ」1825年頃
のオランダのタイル

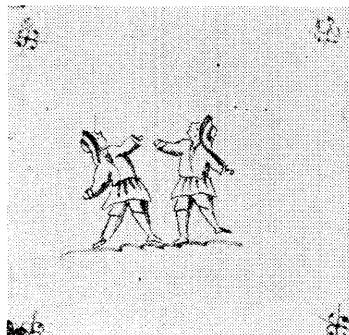


図13 「棒立てごっこ」18世紀の
オランダのタイル

にやつてくる。
ド・マイヤー^{注7}や
ハルトマン^{注8}とレ
ンスも、この遊
びの内容につい
ては、負者であ
る女の子が勝者
を背負っている
のであるう、と
推定しているだ
けである。しか
しこの少年が首
に白いホウタイ
を巻いているこ
とから、あるいは
病人ごっこをし
ているのだろう。



図15 プリューゲル「子牛の脂または
袋かつぎごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑬)

他方、J・ヒルズはこの遊びに対し隠れんぼを考えている。簡単に説明すると、ひとりの子供が壁にむかって立ち、目に手をあてながら、歌の一節を歌つている間に、他の子供たちは隠れる。鬼の子供が仲間を全部見つけると、この遊びは終りとなる。この隠れんぼの一種にPeerd-in-delucht (空中馬) と呼称される遊びもあり、まず、AとBの二組に分れる。それからA組全部が目隠し鬼になり、B組の子供の隠れ場所を探す。A組のひとりがB組の子供を見つけると、B組の残りの全員がA組

の方へ走る。その時、見つけられたB組の子供がA組のひとりをつかまると、その子供は“馬”になり、そのB組の子供を背負わなければならぬ。そこでヒルズは、このブリューゲルの場面が、ちょうどこの段階をいたものだ、と推定している。この遊びが隠れんぼとするならば、ラブレーの『ガルガンチヨア物語』第二十二章でも “A la cutte cache” (あへこか) の列挙がある。

54 投げ独楽 Priktol (図16)
鞭独楽 Drijftol (図16)

同じ建物のアーチェードの下は舗装した床で、五人の男の子たちが独楽回しに夢中になっている。しかしそく見ると二種類の独楽がある。鞭を使って独楽のボディを打ちながら回す「鞭独楽」(はたき独楽ともいふ) drijftolと独楽のホディーに紐をかけて、地面に向かって投げ打つて回す「投げ独楽」 priktol である。同種類の遊びはブリューゲルの「謝肉祭と四旬節」の喧嘩にも画かれてある(図17)。



図17 ブリューゲル「独楽回し」(「謝肉祭と四旬節」の部分、油彩、1559年)

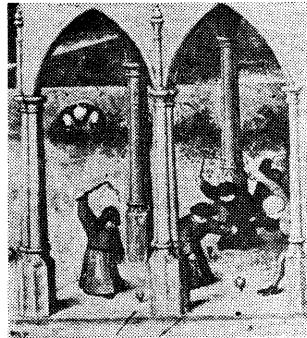


図16 ブリューゲル「投げ独楽」「鞭独楽」(「子供の遊戯」の部分⑬⑮)

独楽、とくに土器製のそれはすでに紀元前三五〇〇年のバビロニア時代から知られている。もちろん古代ギリシャ時代にもホメロスやアリストパネスの文学に言及されてゐる。ショリーマンはトロイ発掘の際、土器製の独楽を発見した。またポンペイイでも発見され、今日ナポリ

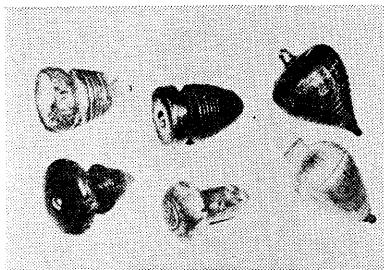


図19 「鞭独楽」(左4点)と「投げ独楽」
(右2点) 1920世紀。木製

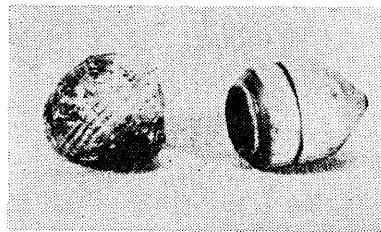


図18 「投げ独楽」左は1500年頃、直径4.7cm
高さ、47cm。右は1575年頃、直径4.1cm、
高さ5.8cm。木製

の国立博物館にその遺品をみることができ。なお独楽はギリシャ語で *strombos*、ラテン語で *strobillus*、*turbo* と書かれる。

このように独楽遊び

の歴史は古く、またその分布も世界中いたるところにあるといつてよいだろう。独楽の材質は一般には木製で彩色されたり、「投げ独楽」の場合は紐がしっかり巻かれるようによくボディに線溝が施こされる場合も多い。さら

に兩種類とも金属の心棒がある(図19)。歴史的には「鞭

独楽」の方が古いので、この遊具から説明しよう。

ブリューレゲルの画面には二個の「鞭独楽」がみられるが、奥の黒っぽい独楽は他の種類とも比べても細長く一番大きい。手前の鞭独楽はごく一般的なもので、その形は上部が円筒形をなし、下部が円錐形だが、その間に浅い段があるため、きのこ型ともいわれる。回し方はまず心棒の先きを少しばかり盛りあげた土の上に立たせ、手回すか鞭で打つか、また鞭を少しばかり心棒に巻きつけ回す。時には靴や木靴の下で回すこともある。回りはじめたら、鞭で胴部を打つのですが、鞭は棒の先きに一本ないし数本の紐を縛ったものである。ブリューレゲルの画面では二人の男の子とも二本の紐の鞭を使っている。

十七世紀のオランダの版画(図20、21)やタイル画(図22)でも一本ないし二本のみのものが圧倒的に多い。

「投げ独楽」は梨形で、上にも心棒が突出している。遊び方は、まず紐を心棒からボディの上までいっぺんに巻きつけ、紐の先を小指と薬指にはさみ、親指と人差し



図21 E・シリマン「鞭独楽」（図20と同じ）



図20 E・シリマン「鞭独楽」
(J・カツ「結婚について」
1642年より) 銅版



図22 「独楽回し」オランダのタイル

には相手の独楽を狙う一瞬の緊張感にみなぎっている。このように「投げ独楽」の方が動作も激しく、ゲーム性も富んでいる。なおタイル画(図24)をみると、回っている独楽を人差し指と中指には

指で上部をしつかりつかんで、上から地面をたたき割る（オランダ語の *kappen, beulken*）ようにして投げる。マルテン・ド・ヴォスの版画(図23)にみられるように、時には地面に線で輪を描き、倒れた独楽 *legtol* をめがけて自分の独楽を投げ当て、輪の外へ出してしまおう。あるいはおはじきか小石を押し出したり、すでに回っている相手の独楽をめがけて、自分の独楽を打ちつけ、枠外に出す。ブリューゲルの画面には輪の線はみられないが、右二人の男の子の遊びはまさしくとそれに該当する。とにかく一人の男の子の動作

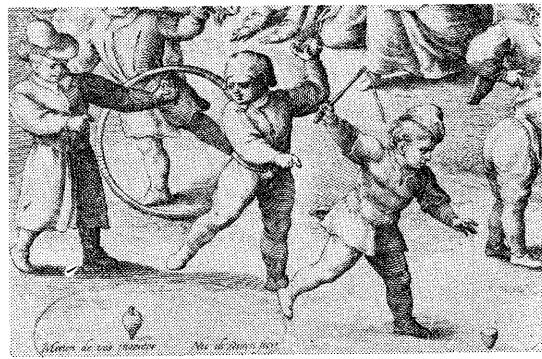


図23 マルテン・ド・ヴォス「独楽回し」(ド・ブライン
発行「幼年期」の部分) 1615年頃

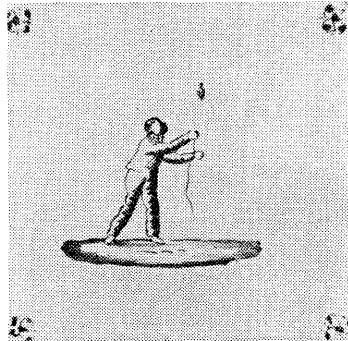


図24 「独楽遊び」オランダのタイル 1825年頃

さみ、他の手の平にのせたり、空中に飛ばしたりする遊び方もある。ところで独楽が文学の中はどう描写されているのだろうか。古くはローマの詩人ウェルギリウスが『アエネーイス』の中で、娘をアエネーイスに嫁がせることに反対した母アマータの乱れた気持を、独楽に譬えてこう述べている。

「あたかも時に子供らが、

大きい輪になり独楽あそび、しながら遊びに熱中し、鞭をふるって人気ない、広間をせましと追いまわす、廻れる独楽もさがらに、(独楽はこのとき打ちおろす、鞭にしばかれあちこちに、曲線描いて走せあるき、

無邪気な子供らその上に、好奇のまなこを注ぎつつ、

まわる黄楊の木の独楽を、あやしみながらなおもまた、

鞭でそれに活を入れる)、それに劣らず激烈に、

体を動かしアマータは、幾多の都市の真ん中を、

猛き市民のあいだ抜け、ひたすら狂つ

往10
て荒れまわる。」

なお興味深いのは一二四〇年頃に書かれたティロルの無名詩人の「悪妻について」と題された詩往11である。そこでは虐待される夫は鞭打たれ、くるくる回りをする独楽に譬えられている。

「鞭に打たれくるくると回る独楽を、
彼女は決して得なかつた、

有無を云わざず私を鞭で

回す時は。」

(つまり彼女は玩具ではなく、人間独楽をもつてている)。

またエリザベート・フォン・テューリンゲン(一二〇七~一二三一年)も、子供の遊具を次のように列挙し

た。「種々の子供の遊戯。ガラスや土で作られた独楽や沢山の指輪、それに他の沢山の小間物^{注12}」

さらに十七世紀のオランダの作家ルーマー・フィッシャーの寓意詩(一六一七年)も人生への教訓にあふれている(図25)。

「多くの人びとは十字架と強いられた生活のもとに置かれているかぎり、道徳的である。

しかもしも鞭がとり除かれるならば、

彼らは神への仕えをやめ、怠惰になる。

ちょうど独楽が打たれ、鞭打たれない」と、

すぐにはずみがなくなり、横たわってしまうよう

に。^{注13}」

他方、フィッシャーは「各自が己れの時を」という詩

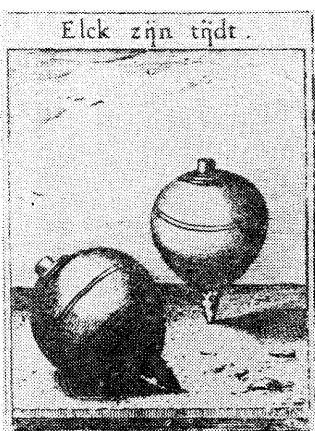


図26 「独楽」(図25と同じ)



図25 「独楽回し」(ルーマー・フィッシャー『寓意人形』より 1614年) 銅版画

安らぎを求める。^{注14}

同時代のオランダの詩人ヤコブ・カッツも鞭

打たれ、ようやくくるくる回る

独楽をつぎのような詩(一六二五年)で教訓的に謳っている。

「強い紐に鞭打たれると、独楽は床の上で生々

(図26)において、回る独楽と休む独楽の二つを図示しながら、こう謳っている。

「われわれ人生は多くの不安に溢れている。しかし

誰もがふらふらして回転するよりは、静かで平和な

と回る。

ひとが強く打てば、それだけよく回る。

しかし鞭の力が少し弱まると

独楽は土の上に倒れてしまう。

そしてもう一回も回りはしない。

永遠にひとつの大塊になってしまふ。

ひとは悲しみと不幸なとき以外、

決して自分のことに注意しない。

苦しみのない生活をしていると

無為のためすぐ鎧がである。

見よ、富に恵まれた人間が休むと、

彼の心は情欲に走る。^{註15}

このほか十六世紀のドイツの詩人

ニコラス・ロイスナーは鞭で独楽を

回すことができても、人はそれが何

廻へ行ってしまうかコントロールで

きないという事実を、「怒りは一

時的な狂氣」の比喩に用い、狂った

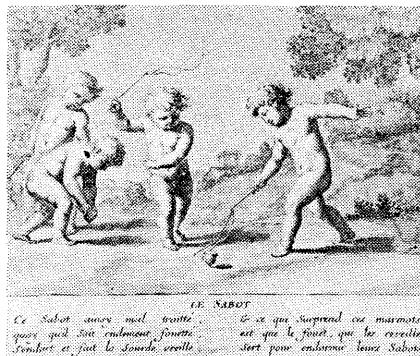


図27 クローディン・ブゾネ・ステラ
「鞭独楽回し」(図4と同じ)

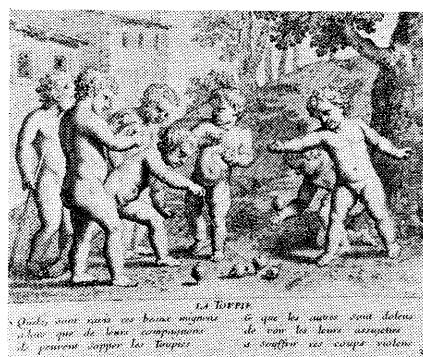


図28 クローディン・ブゾネ・ステラ
「投げ独楽回し」(図4と同じ)

激怒は突然彼を駆り立て、どこへ向かわせるか分からな
い、という風に描写している。あるいは十七世紀の初
期、スペインの詩人オロスコ・コバルビアスも、鞭打た
れてはじめて動き回る独楽を惨めな賤しい下男の性質に
譬えて^{註16}いる。

最後にジャック・ステラの「鞭独楽」le sabot の詩に
注目しよう(図27)。

「鞭独楽はこのようにひどく扱われ、

乱棒に鞭で打たれているのに、

眠ったり、知らん振りをす。

この子供たわをおどるかすむのは、

彼らを目覚めさせる鞭である、

それは独楽を眠らせるのに役立つのである。^{注12}

ただしこれは独楽を「眠らせ」^{注13} endormir とするのは、独楽が最大のスピードで静かに回ってじゅく状態を意味している。

△ヨーロッパの「投げ独楽」 la toupie ^{注14} は(図2)。

「」の可愛らしい子供たわ。

心んなに歓喜してこゑりむか。

仲間と一緒に独楽を投げてねむへがやあむふら。

他の子供たわは、

強こ一撃に耐えてる、自分の犠牲者(独楽)をみ

る」とがどんなにか悲しいことであらうか。^{注15}

以上、独楽に関する種々の時代の詩を紹介してきた

が、主に「鞭独楽」の方に、怠惰な人間への教訓が含まれ

れていたよへどある。

(東京工芸大学)

注1 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verhaald*, Antwerpen 1941, p. 7.

注2 J. Bolte, *Zeugnisse zur Geschichte unserer Kinderspiele*, 1909 p. 398.

注3 Jacques Stella, *Les Jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 15.

注4 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspiel 1560*, Wien 1957, p. 31.

注5 V. Zingerle, *Das Deutsche Kinderspiel im Mittelalter*, Innsbruck 1873, p. 48.

注6 Jacob Cats, *Kinder-spel*, Saint-Omer 1655, p. 62. (=トマス・ド・メイエレ, *De Meyere, op. cit.*, p. 8.

注7 G. Hartmann en E. Lens, *Héle Joh!* Amsterdam 1976, p. 107.

注8 Hills, *op. cit.*, p. 35-36.

注9 ハニギコカ「トハネーマ」上(景井久之助訳、岩波文庫、昭和六~昭和六〇年)。

注10 「Von dem übelen Weib」(Hills, *op. cit.*, p. 43).

注11 Elisabeth von Thüringen (1207-1231), *Ditselska*, I, Buch 3, IX, "Die heilige Elisabeth" (ca. 1300), p. 389 f.

注12 Reemer Vischer, *Het derde schoot van de simepoppen*, Amsterdam 1614 (reprint: *Proefdrukkijck Verneuk* 1988, P. 49) (第111版)

注13 Roemer Vischer, *Zinne-poppen*, Amsterdam 1614, No. 20 (第1版)

Cats, *op. cit.*, p. 32-34.

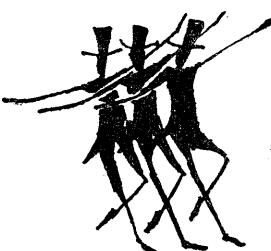
注14 Nicolas Reusner, *Emblematum*, No. 17, Frankfurt 1581.

注15 Orozco Corarrubias, *Emblemas Morales.....* No. 76. Stella, *op. cit.*, No. 3.

Ibid., No. 22.

生活主義保育の源流（下）

金子真知子



第二章 保育界における宗教排斥問題

第一節 京阪神「三市連合保育会」の成立

『婦人と子ども』発刊より三年前、京阪神「三市連合保育会」が明治三十一年十月十六日に結成され、翌三十一年七月には『京阪神保育会雑誌』が発刊されている。

にキリスト教主義の頌栄幼稚園を神戸に開設したとして知られている。そして、このハウの提唱で、京阪神「三市連合保育会」が結成されるに至ったのである。しかし、ハウを園長とする頌栄幼稚園が中心となっていた「神戸保母会」は、結成後、わずか五年で、この「三市連合保育会」を脱会している。

この脱会の経緯は、極めて複雑であり、この背景には、従来の通説の様に、「宗教上の対立」という以上のものがいると思われる。

（43）は、それから一年後、明治二十二年の十月、十一月

そしや、ここでは、脱会の経緯を詳述し、ハウがその

保育論を通して、当時のわが国保育界に投じたものの意義について、考察し、更に、この脱会へ至らしめた、師範学校系とキリスト教系幼稚園、双方の「生活」概念の相異についても検討していく。

ハウと京都・大阪二市とのつながりは、来日以降、彼女の保育法をめぐつて始まっており、少なくとも、京阪神にあつてリーダー的な役割を果していった。この様な立場にあつたハウらが出席した、明治三十年十月十六日、西区東江幼稚園での大阪市保育会の際に、京阪神「三市連合保育会」は「創立」されている。⁽³⁾ この連合保育会は明治二十二年九月に、全国で初めて結成された保育会である「京都市保育会」を中心に、明治三十年七月二十日に結成された「大阪市保育会」及び、明治三十年十月九日につくられた「神戸保母会」（後、明治三十五年四月から「神戸市保育会」となり再発足）から成っている。しかし、ハウを指導的な立場に仰ぐ「神戸保母会」は、この連合保育会結成後、わずか五年の、明治三十五年四月八日に脱会するに至る。しかし、この脱会に至る原因

の芽は、すでに、第一回大会からあつたものと考えることができる。

第一回「三市連合保育会」大会の席上、取り上げられた京都市保育会提出による、第一問題は、『京阪神保育会雑誌』第一号（明治三十一年七月発行）によると、次のようなものであった。即ち、「恩物の取捨選択」であり、この「提出の趣意」として、京都市側は次の様に説明している。

「二十恩物は『フレーベル』氏の創意にして幼稚園の恩物は皆之に則る然れども我同情として一々之に準拠すべきや」。

つまり、二十の恩物をその順序に則つて保育に使用し、厳密にこれを守つて行かねばならない理由を、京都側は基本的に認めてはいらない訳である。しかし、一方、恩物にこめられた意味論を、キリスト教主義保育の立場から重視する頌栄幼稚園の和久山きそは、このような京都市側の考えに、真向から反対の意見を述べている。

「二十恩物は統一上より組立てられたものなれば之を

取捨するが如きことあるべからず」。

明治三十年代におけるこのようなフレーベルの恩物觀の大大きな相違は、どこに端を発するのだろうか。

まず、第一に考えられるのは、日本におけるフレーベル思想導入に、大きな二つの流れがあつたことを指摘しておきたい。即ち、第一章でも述べた様に、ジョホノット著、高嶺秀夫訳、『教育新論』中、「第八章 『フレーベル』氏及幼稚園」においては、恩物がほとんど紹介されていないのに対し、明治二十六年十二月に出版された、A・L・ハウ著『保育学初步』では、その大部分が恩物の紹介に終始しているということである。前者は、伊沢修二や高嶺秀夫に代表される、開発主義教授説による

「運動」、「遊戯」重視の立場に抱るものであり、教育界

では主流となつてゐた。活動性重視のこの伊沢の立場は、その著、『教育学』の中の、「精神上の教育は之を心理学に基くこと」という箇所に端的に表わされている。

つまり、換言すれば、このことは、明治初期以来、一貫してとられて來た、教育における宗教分離政策に通ずる

ともみることができよう。この立場をとる限り、恩物は、宗教的意味性を全く剥奪され、手指を訓練する道具でしかない訳で、このように考えると、京都市側が、恩物を「取捨選択」して、この訓練のためにより有用なものだけを選ばうとした意味の理解が可能となる。

しかし一方、ハウの場合は、あくまでも精神性及び宗教心の教育ということから、これを把えて行こうとする訳である。このような立場の違いは、明治三十二年の「幼稚園保育及び設備規程」や明治三十三年の小学校令改正が公布されるなかで、より鮮明になつてゆくことになる。そして、連合保育会は、その立場の相違を確認する場としての役割を担つたと言えるのである。

第二節 「京阪神連合保育会」の内紹⁽⁴⁾

前節で述べた対立が、より先鋭になつて行く外的要因として、次の三つのことことが考えられる。

- 一、明治三十二年六月二十八日、「幼稚園保育及び設備規程」の制定

二、明治三十二年八月三日、文部省訓令第十二号の発

令

三、明治三十三年八月二十日、小学校令改正

右記三点を中心に、以下順に述べて行こう。まず、第一に、明治三十二年六月二十八日、幼稚園に関するはじめての単独法令である「幼稚園保育及び設備規程」である。これによつて、保育項目が、はじめて次の四つに定められている。これは、「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」の四つであり、この項目わけによると、恩物は、「手技」に位置づけられており、フレーベルの考案主旨であつた遊戯のきっかけをつくるものとしての役割とは、切り離された格好である。つまり、「運動」に重心を置いた「遊嬉」とは別の、「手技」とされている点に着目したい。

「手技」には、次の様な説明が加えられている。

「手技ハ幼稚園恩物ヲ用ヒテ手及眼ヲ練習シ心意發育ノ資トス」（『明治以降教育制度発達史』第四卷、一五一页）この規程は、翌年に出される「小学校令改正」中に解消される訳だが、小学校における「手工」科との関連で

把えると、「勤労ヲ好ムノ習慣ヲ養フ」こと、すなわち、実業教育の一貫としても位置づけられたと考えることができる説である。

このような線上で考える時、子どもがなじみ易いものとそうでないものを「取捨選択」しようとした、第一回保育会大会における京都市の提案理由も明確になつて来る。

また、この規程制定をきっかけに、これを「開申」した東京女子師範学校付属幼稚園内のフレーベル会との交流が増し、第一回大会に、当時の会長であった中村五六を招いて、演説を聞くなど、保育内容研究のリーダーが、明治二十年代には大きな位置を占めていたハウカラ、次第に移行しているのが窺える。

次に、明治三十二年八月三日に発令された文部省訓令第十二号によつて、教育における宗教分離政策が打ち出されたことの保育界への波紋が考えられる。もつとも、訓令十二号は、官立学校において、宗教教育を禁じたものであつて、それを、保育会へも持ち込もうとしたのでは

ないかとも考えられる。

更に、先にも述べたように、明治三十三年八月二十日、小学校令改正が出された。この改正の一つの特徴としては、「体操」「遊戯」の重視があつた訳だが、この影響が、幼稚園の保育にもあらわれ、「遊戯」の中でも

「隨意遊戯」より、「共同遊戯」に重点が置かれ、京都にも、「遊戯会」が発足するなどしており、研究が盛んになつてゐる。この様な軍国主義的色彩が濃くなる動向のなかで、ハウらは、あくまで、保育において、宗教性を強調し、その精神性に固執していつたものと考えられる。

そのような主義の違いが対立し、明治三十五年の京阪神連合保育会からの「神戸保母会」の脱会という形となつて、あらわれて來る。このことの発端となつた、明治三十四年、「連合保育会」秋季大会をめぐる経緯は、極めて複雑なので、表にして概観しておきたい。

すなわち、表によると、開催曜日と、保育会を主催する側の頌栄幼稚園の提出した会順序、つまり、開会に際して、祈禱をするとの予定に対し、変更を申し立てる

という京都市の意見が強硬に通つて行くなかで、ハウたちは、「脱会をした」と言うより、むしろ脱会へと追い遣られた格好である。

その間の経過を『京都連合保育会雑誌』⁽⁵⁾第八号でながめてみると次のようになる。

神戸保母会長、和久山きそは、明治三十四年十月十九日の書状で、「十一月二十三日土曜日午前九時ヨリ、頌栄幼稚園ニテ開会スベク就テハ場所ノ都合ニテ祈禱ヲ以テ始ムルカラ左様承知アリタキ」(傍点原文)ことを告げたが、これに対し、京都市側は、「不賛成」を表明し、大阪市は、態度表明について、京都市に打診し、和久山の書状は実質的に無視されている。

ただし、この神戸市よりの書状をめぐって、明治三十四年十一月二十二日、日彰幼稚園で、「京都市保育会」の会合がもたれ、席上、十二月上旬の神戸市の「京阪神三市連合保育会」には「好意上事情の許すかぎり出席する事」が決定された。すなわち、当日の出席は、個人的「好意」によることを強調している訳である。まだこれ

年月日	事項	出典
明治(以下略す)		高野勝夫著『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』頌栄短大・昭和48年13頁(以下これは記号「A」で表す)
20. 12. 25	米国伝道会より A. L. ハウ来日	A-16
22. 9	「京都市保育会」結成	A-17
22. 10. 22	頌栄保母伝習所開設	B-1
22. 11. 4	頌栄幼稚園開設	B-1
23	小学校令公布	B-1
30. 7. 20	「大阪市保育会」結成	A-16
30. 10. 9	「神戸保母会」結成	A-17
30. 10. 16	京阪神「三市連合保育会」結成	C-662頁
32. 6. 28	「幼稚園保育及び設備規程」定められる	『明治以降教育制度発達史』四巻、151頁 以下C
32. 8. 3	文部省訓令第12号発令	C-45頁
33. 8. 20	小学校令改正される。	B-8
33. 12. 1	「三市役員会」会合於大阪女子師範学校 (連合会開催日をめぐって、京都市と神戸市対立する) (神戸市は「宗教上差支アリ」とし、和久山神戸保母会長は、「脱会をほのめかす」)	『京都府教育雑誌』第108号、明治34年4月
34. 4. 14	第3回全国連合教会大会 於東京 (第2号議案「小学校中学校師範学校に於ける礼式を一定するの可否」)を可決	B-8
34. 10. 19	神戸・兵庫両幼稚園、神戸保母会を脱会	『京都日出新聞』、明治34年11月26日(以下これは、記号「D」と日付で表す)
34. 11. 22	「京都市保育会」会合 於日彰幼 (12月上旬、神戸市の「京阪神三市連合保育会」には「好意上事情の許すかぎり出席する事」決定)	D-明治34年12月10日
34. 12. 7 (土)	「三市連合保育会」大会開催 於頌栄幼	D
34. 12. 12	12月10日付「京都日出新聞」の「三市連合保育会」に関する記事の取消文報道 (12月7日の頌栄での会合は「三市連合保育でなく」) (神戸保母会である旨)	B-8
35. 4. 8	明治35年4月8日付で、神戸保母会が脱会届を提出 (会長の肩書はあるが、印は和久山きそのもの)	B-9
35. 4	「神戸市保育会」結成 (会長は、兵庫県高等女学校長永江正直)	B-9
35. 5. 4 (日)	第9回「連合保育会」大会 於京都市上京区域巽幼	B-9
35. 11. 22	「神戸市保育会」第1回総会開催 於兵庫幼 (席上、連合保育会に入会希望提出を決定)	B-9
36. 10. 3	ハウ帰米 (のち、39年ハウの帰任まで神戸基督教会教師原田助)(のち同志社々長)が頌栄保母伝習所所長 兼教員となる	A-81頁
39	ハウ頌栄に帰任	A-84頁
39. 8	ハウ J. K. U (Japan Kindergarten Union) 結成	A-84頁

より先、大阪・京都の両者は、十一月五日、大阪市東区浪華幼稚園での大阪市保育会役員会での決議事項を、神戸市へ通告しており、それによると、次の二条件が示されている。

一、「本会ハ祈禱ハ絶対的不賛成ニハアラザルモ会長

開会宣告前に於テセラレンコト」（以下原文の傍

点は煩雜を避けるため省略する）

二、「順序書ニハ加ヘザランコト」⁽⁷⁾

このような経過の中で、神戸保母会はこの条付を受け入れることを拒否し、十一月九日付で、脱会書を届けるのである。その書状の中で、神戸保母会長は、次のように所信を表明している。

「連合会ノ順序ヲ定ムルハ當番市ノ自由ノ権ニシテ祈禱ハ清キ心ヲ以テ公然此会ノ為ニ行フモノナリ」⁽⁸⁾

これに關してみる限り、ハウらが「祈禱」に固執したようにも考えられる訳だが、これに影響を与えていたと

思われる、宗教儀式に関する明治三十二年の文部省訓令第十二号は、裏返せば、礼式の統制による、天皇制強化

に他ならない訳であり、ハウの言う礼拝挙行は、このよ
うな国策への拒否とも考えられるのである。例えば、こ
れ以前に、明治三十三年四月二十一日土曜日に、頌榮で
第六回「京阪神連合保育会」が行なわれた時の祈禱の
際、和久山きそは、フレーベルの誕生月を祝したあと、
彼の言葉を引用しながら次の様に述べている。

『小児の靈は人間より来れりと思ふなれ小児は人間
の子であり天然の子であり神即ち造物主の子である事を
思ひて之を発育せしむべし』此言葉の意味を熟知して
幼稚教育に従事せねば保育上大なる誤を生ずると思いま
す。——中略——造物主が人間を作り玉る時は其靈を已
れしなれば、其精神を汲で造られたる恩物を使用すべ
きが当然と思ひます。もしその精神をして方法のみを研
究するに止まるならば此事業を成就する事が出来ませ
ん⁽⁹⁾。

ここに引用した後半部は、明らかに第一回の連合保育
会大会で問題になつた、京都市や大阪市の恩物解釈への

批判であるし、前半部に示された児童觀は、次の明治三十二年十一月三日の天長節でのハウの礼拝の内容とあわせて考えれば、その主旨が明確になる。

「世界には、いろいろたくさんある國があつて、みな天皇と同じ王や大統領が治めているもつと偉い方がある。それは神様である。⁽⁴⁾」

すなわち、ハウが神の存在を言う時、天皇を絶対と仰ぐ当時の日本にあっては、天皇批判となる訳であり、教育勅語下にあって、天皇制強化の役割を担おうとする教育界への痛烈な批判を述べていたと考えねばならない。

このような神の存在を守るためにも、宗教の「自由ノ権」を主張することによって、保育会の大会で、せめて頑栄幼稚園を会場とする時だけは、他市の当番の時に、「君が代」をもつてはじめているように⁽⁴⁾、「祈祷」をもつてはじめようとしたのだと考えられる。それが即ち、宗教人として残された「自由」であったはずであり、教育人としての良心だったはずである。

この会での「祈祷」の件についての意見の対立から、

大会開催前、明治三十四年十一月十九日には、神戸保母会の二つの公立園である、神戸・兵庫両幼稚園が既に同会を脱会し、会の継続は事実上不可能になつてゐる。そのように窮迫した状態の中で、十一月二十三日の予定は延期され、十二月七日土曜日、頑栄幼稚園で「三市連合保育会」大会が開催される。この会の模様を十二月十日付、『京都日出新聞』は、当然「三市連合保育会」として報道している訳だが、十二月十二日の同紙上には、京都都市保育会庶務幹事橋田義亮の名で、先の十二月十日付の記事の「取消文」が掲載されている。それによると、文部省から「儀式上に關し、宗教云々」の訓令が出たことを大きな理由に、「耶蘇教」の儀式にのつとつて挙行された十一月七日の頑栄での会は、「三市連合保育会」のものではなく、あくまで「耶蘇宗教信者」の会員单独で開催したものであり、「神戸保母会」の大会であることを強調している。そして、この会以降、京都・大阪両市は、様々な手段で、頑栄を脱会せざるを得ない状況へと追いやっていく訳である。

このことは、京阪神連合保育会にあって、ハウらがその立場としては、保育理念、保育内容などの点で、次第に孤立しつつあったこと、それが明治三十二年の文部省訓令第十二号で禁止されている宗教上の儀式、つまり、祈禱をする訳にいかなくなつたことを表面的な理由として、キリスト教的色彩を排除したものと考えられる。

ハウらが「自由ノ権」に基づいて、保育会大会を企画運営することは、即ち、神戸市のみならず、「京阪神連合保育会」自体が存立する所以であつたはずであり、それを主張した神戸市を脱会に至らしめることは、「会の精神」そのものを放棄することに他ならない。ハウ達は、政府の施策と異なる立場をもつ保育会のメンバーを、支えようとはせずに、逆に、政府の側につこうとした京都市や大阪市への抗議をしている訳である。

ハウ達が究極的に、複雑な経緯のなかで脱会していくことの意味は、明治三十二年の文部省訓令第十二号発令をきっかけに明確になつて来る。特に、師範学校関係の会員達の天皇への屈伏、行政側への追従に対し、立場の違いを確認し、とつた行動なのではなかろうか。

終章 対立する生活概念の相克のなかで

前節でみて来たように、ハウの京阪神連合保育会脱会は、宗教と教育の問題であったと同時に、他面では、国策に対する立場の相違がもたらしたものともいえる。このことは具体的に、保育の場での子どもの活動、更には、生活そのものを抱えようとする時、どの様な違いと

学校系の勢力が強化され、公立幼稚園が、勅語下の小学校教育との連結強化をはかつていく方向に進むことからも、ハウの保育觀とは異なるであろうことが推察される。このハウの保育会脱会を、保育・教育における宗教の排斥の事例として把え、教育勅語に代表される天皇制の国家主義道徳の強制、その意味での国民の内面的自由への、あるいは、国民生活への介入と関連させて把える時、A・L・ハウの日本保育界に示した姿勢は、重要な意義をもつて来る。

なつて出て来るのであらうか。ここでは、東とハウを対比させて把え、検討していく。

『京阪神連合保育会雑誌』第十九号（明治四十年七月）によると、明治三十九年十二月の大坂市保育会において、ハウは「我が國の事業」について講話し、その記録が掲載されている。彼女は、明治三十六年十月、日本を離れ、明治三十九年三月、再来日したが、その彼女の最初の公的発言とも言えるこの講演で、彼女は意味深長な次の様な内容を語っている。

「教育の第一歩となる幼稚園の保育について最注意をするのは外遊の際でありまして小供は此の間に悪習慣を出すものであります。（中略）一人の人が前に立つて『皆さんは出来るだけさわぎ又出来るだけ話せ』と言われましたがこれは大いに私の考え方と違つております」と断言したのである。また、ハウがここで言う「外遊」とは何か、具体的には明らかではないが、その際、注意しないと子どもが悪習慣を出すというのも、自由遊戯重視への一定の批判を前提したものといえよう。

「遊戯は單に身体の訓練に益あるのみならず、小児が成長して社会の一員となる時他人と共に幸福なる生活を為すの準備を得せしむる最も良き方法なり人若し幸福に生活せんとならば時としては他人の望を成さんが為めに自

それではハウが子どもたちにどのような遊戯なり、態度を期待したのか、そしてどんな幼稚園を構想したのかということが問題になるが、この点に関して、ハウの考えは明治二十年代以降大きな変化はなかつたようと思われる。例えば、彼女の著作、翻訳活動の中でも比較的初期の、明治二十六年に刊行されている『保育学初步』で、ハウは一貫して宗教的雰囲気をつくりだそうとして、「静謐」や「秩序」ということを重視している。⁽¹²⁾ ハウが保育においてこれらを特に強調するのは、室内における活動をその中心としていたからと言うこともできる。殊にその中でも「会集場」に特別の意味を置き、幼稚園全体を宗教的ふん閑気に包まれたものにしようとした⁽¹³⁾点に注目しておきたい。従つて、彼女の遊戯観もこの延長上に展開されて来る。

己の願を棄てて快く之と共に働くべからず」。⁽¹⁴⁾

右記の引用からも明らかのように、ハウにおける遊戯は「幸福なる生活を為すの準備」として位置づけられてゐる。だから、たとえ遊戯それが自体が幼児にとって意義あるものだとしても、ハウの場合、宗教的淨福に包まれたという意味での「幸福な生活」は当然遊戯以上に重要な意味をもつて来る。

また、ハウの「生活」観の弱さは、あまりに容易に「自己の願」を「棄てて」しまえ、あるいはむしろそれをこそ良しとするところにあるようにも思える。しかし、國家の政策の下に、唯一絶対の日本国民としてるべき生活だけをしか考え得なかつた当時の背景のなかで、ハウが、「他人の望」と「自己の願」を対立させて提出したとして、評価せねばならないだろう。

ハウに比して、一方、東基吉の遊戯観は、小学校教育との関係の中で確立されて行く。その過程で、東は、

「一外国婦人」としながらも、徹底的に、ハウらの立場の批判を展開する。例えば、『婦人と子ども』第二巻九号、十号に、「現今の保育法につきて」を連載し、その中で、「婦人の一況保守的傾向」として、感情的とも言える程の批難をくり返し、「可憐なる我が幼児」の立場にたち、「新しき方法」を考えるべきで、「祖師（フレーベル）に忠ならん」（著者注）ことを墨守すべきでないと主張する。しかし、これはあくまで、単にフレーベル解釈をめぐる反論ではなく、彼自身もこの中で述べているように、「宗教的幼稚園」そのものを認めないと言う主張と受け取らねばならない。次に、東は「真」のものと言う概念を出して来る。つまり、「フレーベル氏の言ひけん、遊戯の真精神たる幼児内心の自發的活動の表出甚だ僅少なるを認知」し、「幼児遊戯の真正の価値」を多くしようと言う訳である。ここに至つて、東の主張は「真正」のものだけをしか認めず、他は排除していくことになり、小学校とともに、教育の画一化へ向つて突き進んでいく。

東はこのようなかで、共同遊戯より隨意遊戯⁽¹⁵⁾に目を向

けはじめる。そのため、「園地」が重要な意義をもつ

て来る。つまり、東の構想する幼稚園に於ける子どもの生活は、自然的環境に囲まれたものとなり、その環境の中で小鳥や家畜を友にして、「自然の恩恵に浴する子ども」を理想とするようになり、「自然の恩物」という言葉を用いて、この自然環境からの子どもへの教育力に注目しはじめている。⁽¹⁶⁾しかし、東が、このように牧歌的

で、しかも豊かな自然を望めば望む程、當時、都會の幼稚園がかかえていた園地が狭いという現実や、押し寄せる軍国主義の波に巻き込まれつた子どもの生活そのものとは、根本的に隔離して行くことになる。この主張は、大正期に入つて、「自由保育」や「自然保育」の流れへとつながつて行く訳だが、そのなかで、特に倉橋惣三らによつて主張された「自由」や「生活」が、あくまで幼稚園内に限定された形でしか発展しなかつたことも含めて、東の主張を受け取らねばならないだろう。

おわりに

実生活における子どもの経験に基づいて教育を進めていくことの有効性に着目した時、生活教育は芽ばえ、開花した。しかし、もと「生活」とは非常に多様なものであり、あくまで個人的特性のなかにおいて存在している。それを認め、尊重していく姿勢なしには、より強いもの、より権力に近いものの方に巻き込まれ、結果、唯一絶対のもの以外は排除する危険性を生み出してしまふ。第二章で取り上げた宗教排斥の事例が、その意味で我々に示唆しているものは大きい。より弱い立場のものの存在をこそ認め、個々人の多様性を包含していくところにはじめて、生活教育は人々と脈うつものになるのだろう。

（常磐会短期大学）

二二

(2) (1) 注

⁽¹⁾『京阪連合保育会雑誌』第八号、(明治三十五年七月) 参照
これに関する、水野浩志氏は次のように指摘し、それが人口に膚浅

している。

「明治三十五年頃榮幼稚園で連合保育会の大会を開くにあたつて、開会の始めに礼拝祈禱を行うこと、および日曜の大会は行なわないこと」というハウの方針が認められなかつたことから、ついにリーダー格としての頃榮みずから三市連合保育会を脱会してしまつた。これは、ハウの宗教的信念から出たことはいえ、云々」（岡田・宍戸・水野編著『保育に生きた人々』風媒社、昭和四十六年）

ついでに指摘しておくと、ここに「明治三十五年頃榮幼稚園」での会をめぐつて脱会したとなつているのは、後述するように、明らかに、明治三十四年の誤りであろう。

『京阪神保育会雑誌』第一号、明治三十一年七月

(4) 摘稿「教育における宗教分離政策の保育界への影響——京阪神連合保育会の内紛——」（『常磐会短期大学紀要』第十号、昭和五十七年）を参照されたい。

「神戸保母会」脱会後の明治三十五年七月に出されたこの第八号だけは、このように名称を改めている。

『京都日出新聞』、明治三十四年十一月二十六日

前掲『京阪神連合保育会雑誌』第八号

同右

『京阪神保育会雑誌』第五号、明治三十三年十月

高野勝夫著『エ・エル・ハウ女史と頃榮の歩み』、頃榮短期大学、昭和四十八年、六十五頁

(11) 『京阪神保育会雑誌』第一号（明治三十一年七月）から第七号（明治三十四年十一月）によると、第一回大会から第七回大会まで、第三回及び第六回の頃榮を会場にした大会を除いては、すべて「君が代」

で始められたことが明記されている。

(12) 「去れば第一に為すべき事は小児が静謐に幸福なる空氣の中に生成し得るため秩序及静肅を幼稚園中に持ち来すことはなり此秩序なる者は法則に従ふ事によりてのみ行はるべし而して幼稚園に於ては保母の知る所の法則は即ち最良の法則なり」（『明治保育文献集』第五卷、二五五頁）

(13) 「小供に随意なものを持たせて来させやはりこれを会集場に並べてその前で神に感謝せしめるのであります。（中略）そこで小供をこの室に入れるごと彼は自然に感謝の意を表し今年恵まれたすべての物は来年の準備として与へられたのであると云ふ事も自ら悟るのであります。」（『京阪神連合保育会雑誌』第十九号、明治四十年七月、「我が國の事業」）

(14) 『明治保育文献集』第五卷、『保育学初步』、一二八頁
東の解説をみてみると「共同遊戯とは通例謂はゆる遊戯と称するものであり、「多數の幼児を集め、遊戯室に於て、楽器に合はせて遊戯せしむるもの」とし、「隨意遊戯」とは、「幼児をして各自隨意的に自然的に、或は保育室に於て、或いは運動場に於て、思ひ思ひに色々遊楽せしむるものをいふ」としている。

（婦人と子ども）第一巻第九号、「現今の保育法につきて」）

(16) しかしこのような環境重視の論は、谷本富の次の論へとつながるものであつたことをふまえておかねばならない。「幼稚園と云ふものは家庭が善良であつて、而して其母たる人が相当の素養のある人が、左なくとも母に代るべき相当の素養のある人がある場合に於ては、必ずしも必要なからうと思ふのであります。」（谷本富著、「幼稚園を如何にすべきか」、『京阪神連合保育会雑誌』第十九号、明治四十年七月）

今月号はいつもより長い記事が多くなつてしまつた。その一つはお茶の水女子大学のキャンパス内の樹木についての座

議会である。講堂の建物に沿つて植えられてゐる緑の樹木はどれも同じように見える普通の木であるが、意図して違つた種類が植えられていること、図書館のわきには楕の木という中国の聖木が植えられており、それは旧約聖書の聖木モレの

テレビの木と同系に属すること、幼稚園の藤の古木は震災で焼けたお茶の水の園舎からもつてこられたことはよく知られてゐるが菩提樹が何本もあること、グランドにはくぬぎの大木があつて、瞑想の木として女高師の生徒達に親しまれてきたことなど、ふだんあたりまえのよう

に見ている樹木が、それぞれの歴史をもつてそこに根を張つてることにあらためて氣付かされる。お茶大とかぎらず、どこの幼稚園、学校にも、よく見れば樹木の発見があるのでないだろうか。樹

木はそれが見てきたであらう歴史を考えさせるし、また、新たな樹木を植えることは新しい歴史を開くことでもある。

十月号 ◎ 定価二七〇円

昭和五十七年九月二十五日 印刷
昭和五十七年十月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行人 津 守 真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

も、本誌の復刻は意義あることと思つて
いる。懸賞論文で優秀賞に選ばれた、金子真知子氏の論文は本誌創刊直前の時期

の関西保育界におけるハウ女史に関する研究である。ことは保育大会開催日についての小さなできごとであるがこれは現代の幼稚園の公私立の根本を考えさせてくれる。

東京都千代田区神田小川町三ノ一
印刷所 株式会社 フレーベル館

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中!!

幼稚園教育早わかり 一問一答

文部省幼稚園教育課内 幼稚園教育研究会 編著

推せん 文部省初等中等教育局長 三角哲生氏

幼稚園教育の内容から法令にいたるまでの総合的なガイドブック誕生!!

本書は、豊かな幼稚園教育のために、その内容から法令、通達にいたるまでの諸問題を、文部省幼稚園教育課のメンバーが総力を挙げて懇切丁寧に説きあわした画期的なガイドブックです。幼稚園教育の向上をめざす人びとにとって、本書はまさに必携の1冊といえましょう。

A5判・276頁・定価 1,200円

幼児を のばす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

微妙で大切な保育のカンどころを、がっちりと読みとろう!

子どもたちに豊かな保育をと心をくださいておられる先生や、子どもがよくわからない、きっかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- | | | |
|---------|----------|---------|
| ①保育の視点 | -ここがポイント | 海 卓子・著 |
| ②指導計画 | -ここがポイント | 高杉自子・著 |
| ③絵画の指導 | -ここがポイント | 林 健造・著 |
| ④音楽の指導 | -ここがポイント | 早川史郎・著 |
| ⑤体育の指導 | -ここがポイント | 三宅邦夫・著 |
| ⑥自然の指導 | -ここがポイント | 小山孝子・著 |
| ⑦ことばの指導 | -ここがポイント | 阿部明子・著 |
| ⑧ごっこ遊び | -ここがポイント | 笠間典美・著 |
| ⑨園行事 | -ここがポイント | 仲田あつ子・著 |
| ⑩母親対応 | -ここがポイント | 本吉圓子・著 |

B6判・セットケース入り・セット定価 9,600円

<くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

好評発売中

子どもの遊び

(全6巻)

○歳から二歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ

本吉圓子 田中文子 著

絵・浜田洋子 川上尚子 絵野いわこ

三歳から六歳(3巻セット)

本吉圓子 前典子 笠間典美

田中文子 矢作邦子 著

絵・ふじたひでのみ 上條鶴子 むかいながまさ

いざれもセッテケース入

セツア定価 各6,000円



○歳から6歳までの発達に応じた基本的な遊びをすてきなイラスト入りで紹介。

この本に収録した遊びは、○歳から6歳までの子どもたちの成長過程において、だれもが大好きで、必ずといってよいほど通じる遊びです。

また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の田でまとめたものです。

遊びの中で何が育つて
いるか、保育者はどんな
かかわり方をすればよい
か、どうしたらその遊び
がさらに樂しくなるかな
などについて考へ直すヒントがたくさんもり込まれ
ています。



イラスト 浜田洋子

ワ・ワンくん こにこちは

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館